
凡人と天才？

詩音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

凡人と天才？

【Nコード】

N2308B

【作者名】

詩音

【あらすじ】

どの学校にも特徴はある。森ノ宮高校は頭の良さと権力が比例しているのだ。高一の和泉沙織と高三の羽山葵の非日常的な物語が始まる。*修正いたしました。

プロローグ

ここ森ノ宮学校は県内でもなかなか有名な進学校だ。
設備や授業などはそこの学校と似たようなものだが、一つだけど
の学校にもないことがある。

それは……

「お前今日から俺のパシリな。」

「…は？」

学年一位の言うことはほぼ絶対ということ。

パシリになる高校一年生の和泉沙織とその主人(?)である高校三
年生の羽山葵の普通ではない日常が幕を開ける。

***01* (前書き)**

本文修正しました。

もしよければ後書きもご覧ください。

01

拝啓

伯父さん、伯母さん。元気にしてますか？

寮生活から約二週間、私の方はようやく慣れてきました。一応真面目にやってるから心配しないでください。

ただ…妙な先輩に目をつけられたようです。気が向いたらまた手紙書きます。

「……パシリ？」

私は思考回路が一瞬停止した後で聞き返した。

「もしかしてお前パシリ知らねえの？ 使い走りだよ」

目の前の男は呆れたような口調で言う。
「っていうか、この人誰？」

「いや、それくらい知ってますよ？」

相手が先輩だと思い、苛立たしげに肩より少し長い黒髪を指で梳き

ながら敬語で答える。
何でこんなことになったんだっけ…？

始まりはほんの三分前――

一年五組の教室。私のクラスだ。
森ノ宮高校に入学してから二週間。まだ初々しさは残るものの、クラスの中にいくつかのグループが出来ていた。

「次の授業って何だっけー？」

「数学。いい加減覚えてよ佳苗さん」

私も偶然……というか出席番号で後ろの席になった上原佳苗ウエハラカナエと仲良くなっていた。

彼女は日課表を覚える気がないらしく、毎回休み時間に次の科目を聞いてくる。

「ごめん、私そんなの覚えてらんない。全て勉強に向かってるから」

佳苗さんは茶色に染めた髪を手で払う。ゆるく巻いた髪が揺れて綺麗。

「うわー、私に入学試験の結果負けてたのに何か言ってるよ」

「それ言うなよ馬鹿ー」

恋愛の相談とか、部活のこととか。そんなくだらない会話が教室全

体にあった。

「和泉沙織って奴いるか？」

この言葉で教室は静まりかえった。
勿論私達も。

発端はドアに寄り掛かる長身の男子生徒だった。
外見は簡単に言ってしまうと不良。髪色は黒だけど耳にあるピアスの数には正直引いた。顔はなかなかカッコいいけど。

「……私ですけど」

周りの視線、主に佳苗さんのが痛いくらい刺さって。耐えきれずに私は名乗り出た。

「あー、お前か」

ジロジロと私を上から下まで眺める黒髪ピアス男。
はつきり言って良い気分じゃない。

「……何か用ですか？」

相手が何を考えてるかわからなくて、再度質問をぶつけた。
目の前の男の身長が高い分、女でも平均的に高さがあるのに見上げる形になってしまう。

「和泉沙織、お前今日から俺のパシリな」

「……は？」

こうして今に至るわけで。

「何で私がパシリなんかやらなきゃならないんですか」

「ここ森ノ宮のルール」

「ルール？」

そんなの聞いてないよ？

私は自然と眉間にシワが寄った。

「森ノ宮高校には伝統があるの。テストで学年三位以内に入った人間はパシリがつけられるの。それが暗黙のルールね。で、そこにいる羽山葵先輩は三年になるまでずっとトップっていう素晴らしい経歴を持つ天才」

隣から佳苗さんのわかりやすい説明が入った。

「(……この不良がトップ？ 天才?)」

私は疑わしげに目の前の男、羽山葵先輩を見上げる。

失礼だけど天才に見えない。

「……ん？ 何で佳苗さんそんなに知ってんのさ？」

「二週間かけてあたしが集めた情報。かっこいい男の子のデータは女子高生の必須アイテム！」

佳苗さんは高らかに叫ぶ。片手には赤いチェックの可愛い手帳があ

った。

「はあ……」

いまいちついていけなくて、曖昧に返事をした。
女子高生の必須アイテムって……。

「ってわけで、今日からパシリよろしく。あ、昼飯は購買の焼そば
パンで。屋上まで来いよ？」

それだけ言って羽山先輩はさっさと教室から出ていった。
廊下からは女の子達の甲高い歓声が響いていて、なんだか頭が痛く
なってきた。

「あの羽山先輩のパシリか……良いなあ、頑張ってねー」

他人事な佳苗さんは自分の席に戻った。
私達、友達じゃないの!?

「まじですか……?」

こうして私の非日常的なパシリ生活が始まりを告げてしまった――

01 (後書き)

読んでくださりありがとうございます (*^o^)
頑張って書きますのでよろしくお願いします。

後書きに登場人物のことを少し書こうと思います。

一応主人公は和泉沙織です。まあ顔は人並みですね。頭は良いです。
320人中10位とか。ただ運動は苦手。
皆さんに好かれる子にしたいです。

***02* (前書き)**

上手く文章がまとまらないのに登場人物増えちゃってます。
*修正しました。未熟ですが読んでみてください。

02

昼休み――

「はっ……はあっ……」

私は屋上への階段を登っていた。

あーあ、何でこんなことしてんだろう私……
両手には焼そばパンの入った紙袋。

屋上のドアを開けると真っ青な空が広がっていた。

「おー、お疲れ」

息を切らしている私にのんびりした声が耳に入ってくる。それは私が今苦手な人No. 1のもので。

「……買って来ました」

「悪いな」

優雅に寝転ぶ羽山先輩に紙袋を渡す。

それなりに睨みを効かせたつもりだけど、当の本人は全く気付いてないみたいで更にムツとなった。

「へえーっ、こいつが新しいパシリなんすか」

いつの間にいたのか金髪の男が私の真後ろにいた。羽山先輩同様、顔は悪くない。

素頓狂な声を上げて、ジロジロ人を見てくる辺りは羽山先輩にそっくりな不良その2。

「俺、宮原修平。葵先輩の一個下だから一応お前の先輩」

よっぽど疑わしい目をしてたのか、私を見て宮原先輩は名前を名乗った。

「……和泉沙織です」

「沙織ね、よろしく。それにしても意外だなあ、葵先輩がこんな真面目そうな奴パシるなんて」

真面目で何が悪い。進学校ならガリ勉が集まるもんでしょうがっ。しかも早速呼び捨てだし。軽い男ばっか。

「つーか俺来ないと思ってた。一方的に言ったのによく来たな、お前」

少し意外そうな表情を向けられる。

そりゃあ私だって行く気なかったですよ。

「だって佳苗さ……友達が行かないと酷い高校生活を送ることになるって……」

「はあ？」

羽山先輩は間拔けな声を出す。
ますます天才のイメージから遠ざかってるよ……。

「成程なあ。葵先輩人気あるから、先輩を敵にしたら森ノ宮の女子
半数は敵になるぜ」

「……恐っ」

その光景を想像して私は顔から血が引いた気がした。

「沙織、ちょっと来い」

「何ですか？ お金なら持ってませんよ」

「馬鹿、カツアゲじゃねえよ。ほら」

ずっと羽山先輩は拳を私の前に出した。仕方なく出した掌には小銭
がいくらか。

「？」

わけがわからず羽山先輩を見やる。

「昼飯代」

「あ……どうも」

掌に乗った百円玉や五十円玉。それをじっと見つめて握り締める。

「またなんかあったら連絡すつから」

最初にパシリ宣言されてすぐに携帯の番号を教えてたので、悲しい
ことに連絡はすぐにとれる。

「……わかりました。一応言っておきますけど、私好きでパシリやるわけじゃないですからね！」

パシられてるから、昼食代を払ってもらえるなんて予想外で。

頭が混乱した勢いで羽山先輩に宣戦布告をしてから私は屋上から出ていった。

「佳苗さん、宮原修平って人の情報！」

息を荒げて教室に帰る。私はすぐに佳苗さんに詰め寄った。

「……二年生の学年トップ3に入る秀才。顔もかっこいいから女子に大人気だよー。あ、金髪は高校に入ってから染めたんだってさ」

佳苗さんは手帳を見てスラスラ答える。

手帳の中を覗いてみたいけど、知りたくないことまで知りそうで勇気が出せない。

「じゃあ羽山先輩との接点は？ 不良仲間？」

「ちっがーう。なんと二人は寮の隣人さんなの」

この学校には寮があって、親元を離れて暮らす生徒が半数以上。私と佳苗さんもその中に入る。

「だから学年違うのに仲良さそうだったわけか……」

「何？もしかして会ったの？」

「まあ、ね」

「今度何か奢るから、情報頂戴ねっ？」

渴いた笑いで私は誤魔化したものの、佳苗さんはらんと目を輝かせる。

「それよりさ、佳苗さんはどこからそのネタ仕入れてくるの？」

「ふっふっふ……内緒。」

妖しげに微笑む佳苗さん。絶対佳苗さんを敵に回せない、そう誓った私だった。

***02* (後書き)**

はい、今回も人物紹介しようと思います!!

えーと：今回は羽山葵ですかね。沙織の恋愛相手です。

彼はとにかく自分好みの男性を思い浮かべて下さればいいと思います
(適当)

生きることにはそれほど必死ではない人ですね。

03

「ねえ、あの人混み何？」

朝、昇降口はたくさんの人で込み合ってた。

うちの学校の制服は紺色のブレザーだから、廊下が真っ黒く見える。

「この前の模試の結果。ちなみに羽山先輩は一番で深山先輩は三番」

「……相変わらず凄い情報網だね」

「ありがとう」

一応褒めたけど……満面の笑みで喜ばれるとなんか複雑。

「沙織」

「……おはようございます」

名前を呼ばれて振り返ると羽山先輩と宮原先輩がいた。
周りの同性さん達からの視線が痛い……。

「模試の結果もう見た？ お前六番だったぜ」

「え、宮原先輩見たんですか？ あの人混みの中を」

私ならあきらめる。っていうか近付かない。

「退いてくれんだよ。葵先輩と一緒にいたからかも」

宮原先輩が羽山先輩を見るから、私も羽山先輩を見上げた。

「……ツナサンド」

いつもの半分くらいしか目が開いてない羽山先輩は、なかなか迫力があつた。

「わ、わかりました」

それになんとか威圧を感じる。

でも購入のメニューはしっかりリクエストするあたり、羽山先輩らしい気がした。

「ちよっ、凄いよ沙織！ 御三家の二人が一緒にいるの見ちゃったよ！」

先輩達がいなくなってすぐに佳苗さんが騒ぎだす。
目の保養にはなるけど、そんな珍しいのかな。

「っていうか……御三家って？」

聞いたことのない新しい単語。

「三か月に一回、新聞部がアンケートやるんだよ。女子がかっこいいと思う人に投票するの。その上位三人が御三家」

森ノ宮高校は男子より女子の方が人数多いし、イベント事好きだからと佳苗さんは付け加えた。

「へえー……羽山先輩と宮原先輩と、もう一人は？」

「えっとねえ……今体調悪くて休んでるみたい」

正直言っ、佳苗さんは色々知ってるから助かる。私が無知なの馬鹿にしたりしないし。

「ふーん」

「それにしても羽山先輩テンション低かったねー。低血圧は大変そう……」

「先輩って低血圧なの？」

「うん、極度の。朝は誰も近付けないって聞いたー。何か寄ってきた先生殴っちゃったらしいよ」

「そうなんだ……」

よし。これから絶対に朝は会わないことにしよう。

「宮原先輩は今日いないんですね」

昼休み。今日も私は羽山先輩と屋上にいる。

眠気はもうないらしく、朝の不機嫌はどこかに消えた。

「あいつがここにいる方が珍しいんだよ。普段は女のところ渡り歩いてっからな」

「……はい？」

渡り歩く？ 聞き返した私を羽山先輩は一瞥して、寝る体勢をやめて胡座をかいた。

「森ノ宮の暗黙のルールは知ってんだろ？ 修平も三位以内だからそれなりに権力があるわけ」

欠伸をかみ殺して私に説明をくれる。

「お前は知らねえだろうけど、パシリは一人だけじゃなくても良いんだよ」

「えーっと……つまり、何人もパシリがいて転々としてるってことですか」

「そういうこと」

まるで時代劇みたいだな。一夫多妻制か。

「それってパシリの子達はどう思ってるんですか？」

あんまり良いものじゃないと思うけども。

「さーな……吸って良い？」

私が横を向けば、すでに煙草に火をつけている羽山先輩の姿が。煙草も似合うなあ……じゃなくて！

「何やってんですか！ バレたら停学ですよ？」

「ばーか。頭が良きや先公は文句なんか言わねえんだよ。学年六位ならそれくらい知っとけ」

慣れているように、ではなく慣れた様子で煙を吐き出す先輩。

「先輩はパシリ一人で良いんですか？」

佳苗さんの情報では、羽山先輩はパシリを必ず一人に絞るらしい。私よりもっと羽山先輩を大切にする女の子が、絶対いると思うんだけどな。

「俺は大勢の女を相手に出来るほど器用じゃないんでな」
「げほっ……！」

フーッと煙草の煙を私に向ける。軽くむせて涙目になった。直接吸うより間接的に吸った方が危ないんだぞこら。

「明日も頼むな」

それを見て笑いながら羽山先輩は屋上から出ていった。

「むかつくけど、顔の良い男はやっぱり笑った顔もかっこいいや……」
無意識のうちに私はドアに向かって小さく呟く。

「無器用な方が私は良いと思いますけどね？」

少なくとも、私の中で先輩への何かが変わろうとしていた。

***03* (後書き)**

読んでくださり、ありがとうございましたm〔m
えー…だんだん話がゴチャゴチャしてきました(^^;;

今回の紹介は沙織の友人の上原佳苗さんです。

情報通でちょっと馬鹿な子です。

最初は明るいキャラでしたが、のんびり屋になってきました(――；
)
これからちゃんと統一していきたいと思います。

04

私のパシリ開始から十日が経った。
とりあえず一応は順調だと思う。

「沙織、今日戻ってくるんだって！」

興奮気味に佳苗さんが教室に入ってきた。
朝の挨拶がそれ？

「佳苗さん、主語を使ってください」

カバンから教科書を出して机に入れながら私は言う。
興奮すると上手くしゃべれないってこういうことなのかな。

「あ、御三家の最後の一人っ！」

「……ホントに？」

「失礼します」

見知らぬ教師の登場にざわつく一年五組。主に女の子達といって間

違いない。

「授業始めますよ。号令をお願いします」

白衣に身を包んで眼鏡をかけた男は微笑み、柔らかい口調で言う。
すらっと長身に落ち着いた物腰は、大人だということを強調してる
みたいだった。

「きりーつ、気を付けっ、礼！」

ガタガタと椅子が動く。好奇心の塊で出来た私達の視線を一身に受
けて、教師は口を開いた。

「えーと、今まで具合が悪くて入院してました。物理担当の酒井友
喜^{モキ}です」

黒髪を掻き、はにかんだ笑顔を見せる酒井先生。でも女子生徒達の
小声が止むことはない。

「あれが御三家の三人目、酒井友喜先生」

「御三家って……生徒じゃないの？」

私と佳苗さんも例外ではない。

「それほど人気ってわけさ」

「では授業を始めましょうか」

そう言って微笑む先生は、私にはなんだか無機質なものに見えた。
何故かは、自分でもわからないけど。

「酒井先生は彼女いるんですかあ？」

「いませんよ」

「えー、意外！」

「そうですか？」

女子生徒数名に囲まれている酒井先生。

「……戻って一日で人気者だね」

その姿を見て私は呟いた。

「そりゃあ大人だし、かっこいいし……」

「あの先生って敬語が癖なの？」

さっきの会話を見ても、ずいぶん丁寧な言葉使い。

「うん、誰に対しても敬語使うみたい」

「ふーん……」

ぼんやり酒井先生を眺めていたら、ポケットに入れてた携帯電話が震えた。

「ご主人様から？」

「……妙な言い方しないでよ」

メールを見ることに気をとられてたせいか、酒井先生が私を見てたことなんかまったく気がつかなかった。

***04* (後書き)**

今回は宮原修平君の紹介です（^w^）

彼も佳苗さん同様、キャラがはっきりしない人なのですが、とりあえず葵君よりは口が悪くないと思ってください。
葵君とは兄弟的關係です。

05

「帰ってきましたね、酒井」

「……そりゃこの学校の人間だからな」

俺と修平は屋上で堂々とサボり。

しかも喫煙中。沙織がいたらまた怒んだろうな。それを想像したら笑いそうになった。

「やっぱ今も禁句っすか？」

そこは何も言わないでおいた。

詮索をやめた修平と同時に息を吐き出す。煙草の煙が空高く舞い上がった。

「久しぶりですね、葵君」

「……どーも」

昼休みの屋上。俺は噂の酒井と向き合ってる。俺は胡座をかいて、奴は立ってままで。

今日は風があるから、酒井の白衣がバサバサ揺れていた。

「……煙草、やめた方が良いですよ？」

困ったように酒井は笑った。俺の周りに吸い殻がいくつか転がってたからだろう。

ただそれを他の教師に告げることはしない。コイツはそういう奴だ。

「……それより、元気そうで何よりっすね」

「心配してくれたんですか？」

「いや、全然」

俺は冷たく返す。

「……でしょうね」

静かに酒井は微笑んだ。笑い事じゃねえよ。

「俺はまだアンタを許してない」

「そうですか」

二人の間に沈黙が流れる。少なくとも俺は必要以上にコイツと会話したくなかった。

「僕はもう戻ります。ドアの向こうで困ってる方がいますから」

ドアに目をやると薄く開いていた。しかもパシリになった沙織の困った顔がチラチラ見える。

「悪ふざけもほどにしてくださいね？」

酒井の言葉に俺は返事をしなかった。
入れ替わりで沙織が俺の隣に座る。

「沙織、お前どっから話聞いてた？」

いけ好かない奴がいなくなったから楽だ。
俺は寝転がって座る沙織を見る。

「俺はまだアンタを許してないってところ……」

結構聞いてんのな。気付かない俺も俺だけどさ。

「沙織ー、プリン急に食べたくなった。買ってきて？」

「買ってきてって……今来たばかり」

「買ってきて？」

「……はい」

無理矢理沙織を屋上から追い出した。アイツ自身それを理解してる
と思う。

でも何も言わないのは、沙織なりの気遣いだろうな。

「さーて、どうすっかな……」

よどんだ感情に反して、空は真っ青だった。

***05* (後書き)**

読んでくださってありがとうございます (o^A^o)

えー…何か話がおかしくてすみません m () m

今回の紹介人は酒井先生ですねー。御三家の三人目!! まあ普段は
温厚だけど、恨みは根に持つタイプです。

次回もどうぞお楽しみに☆

06

「俺はまだアンタを許してない」

「そうですか」

何ですか、この状況。

「……困った」

私は屋上に開く扉の前にたたずんでいた。
だって重たい緊迫したムードに出来立てホカホカのクロッケパン持
って登場なんて明らかに変じゃん。

「どうしようかな……」

困るものの、耳は扉の向こうにしっかり集中してしまう。
好奇心って怖いよね。

「僕はもう戻ります。扉の向こうで困ってる方がいますから」

って思いつきバレてるし……。

ドアから二人を盗み見れば、羽山先輩と目があった気がした。

扉を開けた酒井先生に慌てて私は頭を下げる。

「……彼のことで困ったら僕のところに行らっしゃい」

すれちがった時、酒井先生が囁いた。

「えっ……」

私が聞き返すと酒井先生の姿はなく。気味の悪さだけが残った。それを振り払おうと足早に羽山先輩の隣に。

「買ってきて？」

「……はい」

疑問形でも有無を言わせない先輩の態度。

でもさっきの酒井先生との会話を聞くと何も言えなくて、私はおとなしく購買に向かった。

「佳苗さん、これあげる」

「おおっ、あたしの恋人牛乳プリン！　ありがとうー」

恋人の牛乳プリンに手を伸ばした佳苗さん。私はそれを高く持ち上げて取れないようにしたらきょとんと目を丸くした。

「そのかわり、お願いがあるの」

私はニツと笑みを浮かべた。

「羽山先輩と酒井先生の関係ねえ……」

プラスチックのスプーンを口にくわえて、モゴモゴと呟く佳苗さん。
そんな姿がどうしようもなく可愛い。

「うん。絶対何かあるはずなの」

「残念だけど、あたしの情報にはそんなのないよ？」

ペラペラと手帳をめくる指は滑らかに動く。

「ホントに？」

「それだけ内密な話なんじゃない？ あたしより他に羽山先輩に近い存在の人に聞いた方が良いと思うよー」

それだけ言うと佳苗さんは幸せそうに牛乳プリンを食べ始めた。

「近い存在……」

「それで俺のどこ来たわけ？」

「宮原先輩なら知ってると思って」

私はまだ教室に残ってた宮原先輩を中庭に連れだした。端から見た

ら告白みたいだけど、これから聞くのはそんな素敵なものじゃない気がした。

「……それ聞いてどうすんのさ？」

「え？」

「沙織が聞いたってしょうがないじゃん？ まあ、聞かない方が良
いと思うけど」

ベンチに座っている宮原先輩は静かに言った。
確かに、先輩の言うことは間違っていない。

「……から」

「ん？」

「私、羽山先輩のパシリですから」

だけど私の頭には、悲しそうな葵の顔が浮かんできた。
なんか、よくわかんないけど放っておけない。

「沙織パシリ嫌がってたじゃん」

「ひ、人の心は変わるものですよ」

横目で睨まれて視線を泳がせた。観念したように金髪頭を乱暴に搔
き、宮原先輩は私を見つめる。

「……ったく、俺が言っただけで言わないでよ？」

先輩はゆっくり話し始めた。

「今から一ヶ月くらい前に、先輩が酒井を殴ったんだ」

「先輩が？ 何で……」

私は目を見開いて驚しか出来なかった。

見た目は不良っぽいけど、人に手を上げる話は聞いたことなかったから。

「原因は女。葵先輩の好きだった奴が酒井を好きだった」

「まさか逆恨み……」

「違う、先輩は我慢して女の応援してた」

私の言葉をさえぎって、はっきりと宮原先輩は言った。

「酒井と女は無事恋人同士になったけど、一週間で終わっちゃった。酒井から一方的に振ったらしいんだ」

聞き漏らさないように黙って宮原先輩の話に耳を向ける。

「女は葵先輩に泣き付いて、その時俺もその場にいて……結構悲惨だったわけ。それでキレた先輩が酒井をボコボコにして入院」

自然と険しくなる私の顔。想像するだけで複雑な気分になる。

「その女の方は今どうしてるんですか？」

「引越したって聞いた」

「そう、ですか」

「……聞かない方が良かったろ？」

宮原先輩の問いに首を横に振る。

「教えてくれてありがとうございます」

羽山先輩と酒井先生のつながりは理解した。今はそれで充分だけど

――
「胸が痛いのは何で……？」

羽山先輩は、その人のことまだ好きなのかなとか、妙に気になる。

「気のせい、だよ。私には関係ないことだよ。うん」

無理矢理納得してみる。痛みには気付かないふりで。

「……沙織？」

「はいっ？」

目の前には佳苗さんの姿。一人の世界に飛んでた私を心配そうに見ている。

「さっき酒井先生が探してたよ？」

「……私を？」

「何かご用ですか」

私は実験用具の並ぶ理科準備室にいた。

「あの金髪君から聞いたんでしょう？　僕と葵君の過去を」

座ったまま微笑む酒井先生。金髪君とは宮原先輩のことだろう。
何でそれ知ってるの……？
少なからず私は動揺していた。

「凶星なら黙らずに認めてください」

「……だったら何だっていうんですか」

眉間にぐっとシワを寄せる。
もう開き直りだ。さっさと済ませて帰ろ。

「酷い話だったでしょう？　好きな女にちょっと泣かれて僕を殴るなんて」

「あの、何が言いたいんですか」

演技がかった酒井先生になんだかイライラしてきた。

「和泉沙織さん。現在葵君のパシリですね？」

確認めいた台詞。

「そうですけど？」

「貴方にお願ひがあるんです。とても簡単な」

「……？」

***06* (後書き)**

いかがでしょうか？

楽しんでいただけたら幸いです（^v^）

今回は紹介すべき人はそんなにいないので以上で後書きを終わらせていただきますm（　）m

07

「沙織、無理してたなあ」

ベンチの背に寄り掛かってポツリと修平は呟いてた。
わざと背後にまわって肩に手を乗せる。

「そうだな、宮原修平君」

俺が声をかけるとピクリと肩が跳ねた。

こっちを向いた修平の顔はなかなか見物だった。

「あ、葵先輩……」

青ざめる修平にニンマリと笑みを見せる。

「んで？　しゃべったわけか」

修平にプロレスの技をかけて吐かせる。

一応これ、新技。

「イデデ……ッ！　だってパシリだから知る権利あるって言われて！」

「俺言わなかったっけ？　他言無用って」

弟みたいなもんだし怒鳴るようなことはしない。その分笑顔で言ってる。

「……すみません」

修平は本気でビビったようだ。
遊ぶのはこんなもんにしとくか。

「……で、沙織は？」

「教室じゃないっすか？」

アイツもアイツだ。急にコソコソ嗅ぎ回りやがって。
確かに知りたくなるような会話だったかもしれないけど、沙織がそんな気にする必要もないはずだ。

「沙織なら酒井先生に呼ばれてましたよー？」

突然上から声がかかる。日光に目を細めて校舎を見上げる。

「あ、沙織の友達……」

「上原佳苗です、どうぞよろしくー」

ヒラヒラと佳苗と名乗った沙織の友達は手を振っていた。

「……酒井に呼ばれたってホントか？」

「はい、ついさっき。もし沙織に何かあればあたしはお二人を一生許しませんからね？」

ニッコリって効果音が似合いそうなくらい微笑む佳苗。

顔は結構可愛かった。

「いろんな情報ばらしますよ？」

性格に難ありみたいだが。

「え、パシリ関係の葵先輩はともかく何で俺まで……」

「たまたまこの場にいたからですー。それより羽山先輩。沙織に何か用事があったんですか？」

「別に。さっき屋上から修平と中庭にいるの見たから気になっただけ」

コイツらが二人きりとか珍しい光景だからつい体が動いた。ただそれだけだ。

「たぶん理科準備室にいますよ？」

「サンキュ」

理科準備室に走り出す。修平も慌てて俺のあとを追ってくる。

「面倒なことになってなきやいいがな」

たぶん無理だろう。そんな気がしていた。

***07* (後書き)**

読んで下さりありがとうございます!!

ほぼ自己満足な感じでやってきましたが…いかがでしょうか?

ちょっと中途半端なところで話を終わらせたので、次回を楽しみにしてください☆ミ

08

「先生」

私は酒井先生に呼びかける。

「どうしました？」

「開けてください」

理科準備室は理科室とドアで一つに繋がってる。

私はその理科室に閉じ込められた。

「僕のお願いを聞いてくださるのなら」

犯人は酒井先生。無理矢理理科室に押し込まれて、気付いたらドアが開かない。

「……出来ません」

「それなら、ドアを開けるわけにはいきませんよ」

「断っただけで監禁なんておかしいですよ！」

私は声を荒げる。

こんなやり方、間違ってるよ。

「監禁だなんて人聞きの悪い。僕はただお願いしてるだけですよ？」

葵君の顔に傷をつけろと」

酒井先生の声は余裕と自信に満ちて聞こえた。ドア越しだから、笑ってるのかもわかんない。

「だから嫌ですってば……」

完全に犯罪だし。バレないようにするって言われても高校入ってすぐに捕まるなんて嫌！

「なかなか決まりませんね。今日はここで一晩明かしますか？」
「なっ……！」

それも絶対やだよ！

ドアを叩こうと拳を振り上げた瞬間。

「嫁入り前の女が外泊ってのはおすすめしねえぜ？　酒井先生よお」
「……来てしまいましたか。葵君」

羽山、先輩……？

「沙織は？」

「ここです！」

バシバシ準備室と理科室の通路ドアを叩く。
手の痛みなんか気にしないくらい、私は必死だったと思う。

「いるのはわかった……ドア壊すなよ？」

「こっ、壊しませんよ！」

「修平、理科室の鍵とってこい」

ふっと羽山先輩の笑った声がした。
ていうか宮原先輩もいるの？

「了解っす」

「無駄ですよ。鍵は僕が持っています」

ちゃりんと金属音がした。

酒井先生が先輩達に見せつけたのかな、なんて想像する。

「なら力ずくでもらう」

拳を軽く鳴らし、羽山先輩は冷たく言った。

「……相変わらず良い度胸ですね」

冷たさで言ったら、酒井先生の方が上かもしれない。

もしかしなくても乱闘直前？

頭に嫌な映像がよぎる。私は無意識に口を開いていた。

「ちょ、ちょっと待ってください」

「……んだよ、パシリが邪魔する気か？」

苛立ち気味な羽山先輩。言い返すのは少し怖いけど、そうも言っ
られない。

「あの、暴力は無しでお願いします」

「沙織ーこの状態で止めんの無理だと思うよ？」

重苦しい空気の中、軽い調子で宮原先輩が言った。

「じゃあ宮原先輩止めてくださいよ!」

「また無茶言うー。俺さっき葵先輩にプロレス技で殺されかけたんだよ?」

またって何ですか。私無理言ったの今が初めてですよ。
まあとにかく、止めてもらうのは無理ってことだ。

「別に問題ねえよ」

「馬鹿言わないでください。また停学になりたいんですか?」

「俺別に嫌じゃねえけど」

「ダメなものはダメです!」

何でこんな必死になるんだろ。まだよくわかんないけど、平凡な毎日より羽山先輩と過ごす方が飽きない気がしたから……かな。

「貴方思いなパシリさんですね」

「ま、俺が選んだからな」

羽山先輩急に機嫌よさそうになってるし。
何でもいいから早く出してよー……。

「では簡単なゲームにしましょうか」

「ゲーム?」

ゲームって……?

その言葉は私にも聞こえていた。

「ここに東大生レベルの問題が五十問あります。それを全て解いたら鍵を渡しましょう」

「東大生レベルって……無理に決まってるじゃないですか！」

いくら天才って噂の羽山先輩でも有り得ないよ……

「沙織さん。貴方は黙っててください」

「……っ」

絶対的な言葉に私は口をつぐむ。

それを見透かしたようにクスリと笑った。

「ちなみに制限時間は二時間。校舎を閉める時間ですからね」

「その制限時間を過ぎたらどうなるんすか？」

宮原先輩が尋ねる。

「勿論、沙織さんには一晩ここで過ごしてもらいます」

サラリと酒井先生が口にした一言。

私にとったらとんでもないしか言いようがなくて。

「はっ？」

聞き返すことしか出来なかった。

「どうしますか？ 葵君」

「……ていうか、何で沙織は閉じ込められたんだ？」

一瞬の沈黙。

この人今更何言っちゃってんのー！

突っ込みしたかったのは私だけなのか、ドアの向こうの人達は平然

としていた。

「彼女が僕の願いを聞いてくれなかったんですよ。葵君の顔に傷をつけてほしいという、ね」

「……逆恨みって奴っすか」

「んで？ それをうちのパシリが断ったわけか」

「ええ。何度言っても嫌がるんです」

だって、出来ないよそんなこと。

「じゃ、さっさとゲームやろうぜ」

「葵先輩、本気っすか？」

「誰に向かって言ってるんだ修平。全国一位の実力、見せてやるよ」

このとき、顔も見えなくて声だけが頼りだったけど、羽山先輩が本気になったのはわかった気がした。

カチコチと時計の針の動きが妙に大きな音に聞こえる。

「あと一時間……」

気がつけば外は暗くなっていた。時計はすでに七時を回ってる。入学祝いで買ってもらった腕時計がこういうことで役立つとは思わなかった。

「はぁ……」

「沙織寒くない？」

ドアに寄り掛かってた私。ギシ、とドアの向こうで音がした。

「大丈夫ですよ。宮原先輩帰らなくて平気ですか？」

私と宮原先輩は一枚の薄い板のドアに背中を預けて小声で言葉を交わす。

「平気平気。だって寮だし」

「あー、羽山先輩と隣同士でしたっけ？」

「何で知ってんのさ？」

「……佳苗さん情報です」

小さな笑みを溢して私は答えた。

「あーあの子か……」

「知ってるんですか？」

「だってその子が教えてくれたんだよ？ここに沙織がいること」

「……そうなんですか」

やっぱ佳苗さんは凄いなあ。明日お礼言わなきゃ。

「そっち怖い？」

「聞かないでください」

気にしないようにしてたけど、結構不気味。だって人体模型とかあるし、虫の標本もくらいと迫力ある。

「電気は？」

「骸骨の近くななんて行きたくないです」

「……なるほど」

じゃあここでしゃべってようか、って宮原先輩が言ってくれたから少し気が楽になった。

「終わった」

疲れ切った羽山先輩の声。勢いよく立ち上がる音に私は少しびくついてしまった。

「一時間四十分、さすがですね」

「早く鍵出せ」

「まあまあ、採点して半分以上間違っていたらゲームは葵君の負けですよ」

何も言葉を返さない二人。呆れてるのか、それとも怒ってるのやら。はつきり言って私も助かると思ったから騙された気分になった。

「僕が採点してる間に彼女と話でもしたらどうです？」

何を言い出すんだこの先生は。

「君は来なさい、中立として必要でしょう？」

「了解」

宮原先輩は立ち上がって酒井先生と奥の方へ行ってしまった様子。小さくため息をついて体育座りに体を動かす。

「沙織」

羽山先輩からいつも聞く声とドア越しはやっぱり違って。なんだかびくりとしてしまった。

「……はい？」

うわ、声が裏返った。恥ずかし……。

「馬鹿だろ」

「は？」

予想外の言葉に私は聞き返す。

「酒井の頼みなんか聞いたフリすりやよかったじゃねえか」

言われてみれば確かにそうだ。

閉じ込められて動揺したとはいえ、私は考えなしだった。

「……すみませんでした」

「別に謝れてわけじゃねえよ。怪我は？」

「大丈夫です……っ」

先輩の声に安心したのか、不覚にも私は泣きそうだった。

歪む視界を消そうと必死に瞬きを試みる。

「葵先輩、俺らの勝ちっす！」

興奮気味で声の大きい宮原先輩。

これで助かる……

「……酒井は？」

「先に校門のところにいるそうです」
「ふーん」

ゆっくりドアが開く。

私は無事に救出された。

***08* (後書き)**

今回は沙織が気持ちに気づいたところを書きました。

：相変わらず下手な文章で申し訳ないです。

次回もどうぞお楽しみに！！

09

「遅かったですね」

酒井先生は校門に寄りかかっていた。白衣から薄手のコートに変わり、いつもの笑みを浮かべて。

「それでも急いできたんだぜ？ カバンとか取りに行ってたんだかな」

羽山先輩が言葉を返す。

「沙織さんの姿が見えませんが？」

「こ、ここにいます……」

目の前に見えるのは宮原先輩の背中。顔をずらして酒井先生に自分の存在を示す。

宮原先輩の前には羽山先輩がいるので、かなり頑丈な壁になっている。

「……やりすぎじゃないですか？」

「沙織ってば酷い目にあってんのにそんなこと気にすんの？」

「いや何ていうか……」

私と酒井先生の会話が遠い気がするんですよ。

二人分と対峙してる分で、ちょっと声を張らなきゃ酒井先生に届かない。

「今回は僕の負けですが、次回は負けませんよ」

「……勝手にしろよ。でも人のパシリを巻き込むな」

キツい言い方の羽山先輩。

「そこは考えておきましょう」

一笑して酒井先生は歩いて帰っていった。
残された私達は寮に向かう。

「あの、一人でも大丈夫なんですけど……」

「いい、送る」

羽山先輩が私の数歩前を歩く。
わざわざ私を寮まで送ってくれるらしい。

「だって男子寮と女子寮の間って五十メートルくらいしか距離無いですよ？」

ただでさえ迷惑をかけてる私は申し訳なく思った。
宮原先輩は早々と寮に戻っていった。周りに人は誰もいなくて、二人きり。

「また何かあると面倒だろ？」

「それは、そうですね」

私はただのパシリなのに……。先輩優しすぎるよ。
ぼんやりそんなことを考えていると。

「明日からしばらくパシリ休みにすっから」

唐突に羽山先輩が言い出した。

「え……。？」

想定外の言葉に頭が固まる。

「中間テスト近くなってきただろ？」

「あ、そっか」

「寂しいか？」

羽山先輩はニヤリと意地悪な笑顔を見せる。

「べっ、別に！」

強がりと言った。たぶん羽山先輩はそれもわかってる。いつも見透かされる気がするんだ。

そこから寮まで私と先輩は黙って歩いた。

「じゃあ、ありがとうございました」
「おー」

結局先輩に寮まで送ってもらった。
背を向けてヒラヒラと手を振る羽山先輩に私は小さく笑みをこぼした。

「そういえば……先輩に好きだった人の話聞けなかったな」

自室に帰って一言呟く。

幸せだったり、ハプニングだったり、私の悩みはしばらくなくなりそうにない。

「へえー……何か現実には有り得ない感じ」

翌朝、私は佳苗さんにお礼も兼ねて昨日あったことを全部話した。
羽山先輩と酒井先生を繋ぐ女の人のことは言えなかったけど。

「でも怪我なくて良かった」

佳苗さんは柔らかな笑顔を私に向ける。
これが最近の癒しになってきた。

「ありがと。先輩達に言ってくれたんでしょ？ お陰で助かったよ
ー」

「ま、酒井先生は信用できなかったからね」

興味なさげに手帳をめくる佳苗さん。

「？」

「あーそれより、テストのことをお願いが」

「……何？」

「えへへー」

恥ずかしそうに頬を染める私の数少ない友人。
とりあえず嫌な予感も真っ先にしたことは間違ない。

「だからこの式は x を代入して……」

「えー何でそうなるのお？」

「ちよっ、ここ図書室なんだから静かにしてよ……」

私と佳苗さんは図書室で勉強をしていた。
っていうより、私が佳苗さんに勉強を教えるって方が正確だと思う。

「だってー……もう勉強やだ」

コテンと右頬を机の上にくっつける。
いちいち動作が可愛い。

「佳苗さんが言ったんでしょ？ 勉強教えてって」

私は授業も真面目にやってるし、それなりに勉強が出来る。だから
テストで特に困ることはなかった。

「言ったよお？ だって私最下位に近いんだもん」

あっけらかんとして佳苗さんが言う。

それは堂々と言って良いものなのかな……。

目の前の佳苗さんを見て少し不安になる私だった。

「そういえばさ、もうすぐ一ヶ月じゃない？」

「……何が？」

勉強疲れを癒しに、私達はファミレスにいた。

ハンバーグを頬張る佳苗さんがテーブルをバシバシ叩く。

「何ってパシリに決まってんじゃない！」

「あー」

カレンダーを見ればテスト終了の三日後がパシリ一ヶ月の日だった。

「羽山先輩どうするのかなあ……」

「さあ？」

「もお、沙織のことなんだよ？ もっと気にしよーよ」

「だって私にはどうも出来ないよ。元々一ヶ月だけの予定だったし」

終わりでも延長でも、決めるのは羽山先輩だから。

「……ねえ、一個聞いて良い？」

フォークを置いておずおずと佳苗さんが聞く。

「何？」

「沙織って羽山先輩のことどう思ってるの？」

「……は？」

思わず食べようとしていたパスタをボタッとお皿に落とした。

「だって最近パシリ嫌がってないじゃん？」

「……単に慣れただけ」

「でも、たまに羽山先輩のこと見てるよ？」

「それは、佳苗さんの気のせいだよ」

「そうかなあ……」

無意識に羽山先輩を見てた……？

佳苗さんから告げられた言葉に私は少なからず驚いていた。

テスト当日――

「佳苗さん、どう？」

「最悪……」

苦笑いで答えが返ってきた。

「じゃあまた図書室で勉強しよっか。」

「うん、赤点とったらせつかくの文化祭がパーだもんね！」

楽しそうに佳苗さんが笑った。

「……文化祭？」

何で五月に文化祭？

「沙織、もしかして知らない？ 森ノ宮は文化祭が早い。今年は五月の中頃だから明日から準備するんだって」

「そうなんだ……」

テストの後にすぐ文化祭か。忙しそう。

「御三家のイベントもあるみたいだよ？ 楽しみだよねっ！」
「はは……」

羽山先輩そういうの嫌がるだろうな。
簡単に想像出来て、渴いた笑いしか出なかった。

「和泉沙織さんっていらっしゃいますか？」

それはあの時と似てた。羽山先輩にパシリとして選ばれた時に違ったのは今私を呼んでるのが女ってあたり。

「あれ、生徒会の副会長だよ」

佳苗さんの目が光る。

「生徒会？」

「そう。確か笹部若葉さんササベワカバって三年生」

まったく関わった記憶がない。

銀フレームの眼鏡を指で押し上げ、副会長はじっと待っていた。

「とりあえず行ってくるね」

待たせるのも悪いので私は席を立て副会長の元へ向かう。

「和泉は私ですけど、何ですか？」

「わたくし、生徒会副会長の笹部と申します。今日は貴方をお願い
があってお伺いしました」

「はあ……」

お願いの内容が何かなんて私には予想出来なかった。

***09* (後書き)**

読んでくださりありがとうございました!!

久々に登場人物の紹介をします。

今回は菜々先生です。

まあ、大人の女性を想像していただければ…

一応留学経験有りの設定です。

10

「ごめんなさい、絶対に嫌です」

「そこをなんとか……お願いします」

「私が言っただけで無理でしょう」

副会長に頭を下げられても困る。

「第一、御三家でファッションショーなんて無謀ですよ……」

「今年の文化祭の企画として上がったんです。正直わたくしもあまり納得していないんですが……多くの女子生徒からの熱意に負けましたわ」

「だからって」

「お願いです。パシリとして動いてる貴方なら説得も可能です」

深々と頭を下げる副会長。

「言うだけ言ってみます。それでダメでも、文句言わないでくださいよ」

「ありがとうございます!」

眼鏡が落ちそうなくらいの喜び様に、私は隠れてため息をついた。その瞬間、ポケットに入れてた携帯電話が震える。

「う……」

相手は今ちょうど会話の中心になってた人。

「もしもし？」

「沙織？ 俺だけど」

「今日は午前帰りだから購買やってませんよ、羽山先輩」

先輩の名前を出すと副会長がピクリと動いた。目を輝かせて私を見
てくる。

こんな絶妙なタイミングで電話してこないでほしい。

私は切実にそう思った。

「馬鹿、違うっての」

「じゃあ何の用ですか？」

「パシりの話。もうすぐ一か月だろ？」

そうだった。私もしかしたらもうパシリ終わりなんだ。

「そうでしたね」

動揺して声が震えそうになる。

「それ、文化祭終わるまで保留でも良いか？」

「わかりました、良いですよ」

まだ羽山先輩のそばにいれるんだ。なんだか安心した。
少し話していると、副会長から痛いくらいの視線を浴びる。

「あー、あのちょっとお話があるんですけど……」
「告白？」

「違います」

そんなんじゃないからっ。ホント副会長が徐々に近付いてて恐いんだって。

「おま……そんなはつきり言うなよ」

電話越しに聞こえる羽山先輩の声。何かいつもと違って新鮮だった。

「じゃあ今から屋上集合な。五分で来いよ？」

「はっ？」

何も言わずに電話を切られた。今から五分後に屋上？

「有り得ないって……！」

「え、沙織さん？」

だげど出来なくて馬鹿にされるのは悔しいから。
私は教室を飛び出した。

「お、四分十二秒」

「……っ」

呼吸困難に陥るくらい息を切らしてるっていうのに、羽山先輩は貯水タンクにのんびり寄り掛かった。

「で、話って何？」

「ちょっ、待っ……」

全力で階段上がったからしゃべれない。

それをわかってくれたのか先輩は私が話し出すのを待ってくれた。

「あのですね」

「んー」

「もうすぐ文化祭じゃないですか」

勇気を出すために太股の横で拳を作る。

「羽山先ぽ」

「やる気ねえよ」

「……え」

「沙織、生徒会の奴等に頼まれたんだろ？」

おー、見事にバレてるよ。清々しいよね、ある意味。

「でも、皆楽しみにしてます……よ？」

「修平と酒井がいりゃ問題ねえだろ」

「問題大アリです！」

勢いよくドアを開けて登場したのは、副会長さん。

綺麗にまとめた髪も息もまったく乱さずにこちらに歩いてくる。

「副会長自ら依頼に来たのか？」

「和泉さんが頼んでダメだったらと思ひましてね」

え、私じゃダメなの予想済み？

何かショックだ……。

「いかがでしょうか。御三家のファッションショーなら盛り上がる
こと間違いなしですわ」

「興味ねえ」

「好きな女子生徒とペアで参加してくださいでも構いませんが」

副会長の言葉に私は固まった。

……隣の人に好きな女子生徒なんて、いるのだろうか。

「それより欲しいもんがあんだけど」

「何でしょうか？」

不敵に笑う羽山先輩を見て私はすぐに不安になった。

「信じられない……」

「あ？」

「賄賂じゃないですか！」

羽山先輩の前には購買のタダ券。

これと引き換えに、先輩は文化祭の参加を承諾した。

「良いんだよ出演料だから」

「なんか違う気がするのは私の勘違いでしょうか」

「そうだろ」

いや、私は間違っていないはず。

「ま、せいぜい足手まといになるなよ」

「……え？」

何の話してるの？

ぽかんと口を開けた私の頭を羽山先輩がわしゃわしゃ撫でる。

「お前も手伝え」

「はっ？」

また突然変なこと言い出したよ、この人……。

「別にモデルやれとは言わねえよ。裏方の仕事やれってこと」

「な……何で私が」

「パシリだから」

その言葉に私は毎回言い返せなくなる。結局頭の中では佳苗さんも誘ってみるかなんて考えてて。

私、羽山先輩に甘いのかな……。

***10* (後書き)**

読んでくださり、ありがとうございます。

次回もお楽しみに♪

11

「和泉さん達が手伝ってくれるから助かりますわ」

「いえいえー、あたしも沙織も暇でしたから。ね、沙織？」

「ははは……」

裏方への参加命令の翌日、私は佳苗さんと一緒に有志として手伝うことになった。

副会長の笹部若葉先輩とはもう顔見知りだから、色々指示をもらっている。

驚くのは佳苗さんの適応力で、人懐っこいって凄いと思った。

「和泉さん」

「はい？」

「職員室に言って模造紙もらってきてもらえますか？」

「あ、わかりました」

私は作業してた手を止めて立ち上がる。

ぐるりと周りを見れば結構な人数が作業に励んでて、その中に自分があるのが不思議な感じだった。

「うあー、失敗した……」

あるだけ持ってくるんじゃないかなったよー。

両腕には色とりどりの模造紙の束がたくさん。

「前が、見えな……っ」

視界が不安定で歩きにくかったはずなのに、急に前の視界が開ける。手にあった模造紙の半分が消えていて、横を見れば見知った金髪頭があった。

「宮原先輩っ」

「これ体育館に持ってくるの？」

「あ、はい」

「ふーん」

それだけ言うと宮原先輩はさっさと歩いてしまつて。

「あ、あの……」

「何？」

「手伝ってくれるんですか？」

宮原先輩は目をパチパチさせて口を開く。

「沙織ってさ、成績良いわりにこういうとき考えなしだよな」

「うっ……」

自分でもわかってますよそんなこと。でも宮原先輩がそんなはつきり言わなくても……。

「目の前でフラフラしてたら危ないから、持ってたげる」

「……ありがとうございます」

パシリの女の子がたくさんいる宮原先輩はやっぱり紳士っぽい。

「元気？」

「え、まあ……元気ですね」

いきなりそんなこと聞くとんだから、一瞬頭が固まった。

「あんま無理しない方がよいよ」

「してませんよ？　むしろ楽しんでます」

パシリになってからいろんな世界を知ってく気がする。
私にはそれが純粹に楽しかった。

「あ、宮原先輩は賄賂もらったんですか？」

「いや？　ただ遅刻と早退をなるべく見逃してもらおうお願いはした」
「……賄賂みたいなもんじゃないですか」

やっぱり損得で決めるのか。まあ予想はしてたけどさ。

「あ、宮原先輩！」

「えーっと……佳苗さん？」

「はいっ」

体育館に着いた私と宮原先輩を迎えたのは佳苗さんで、宮原先輩の存在に他の女子生徒が騒いでうるさかった。

「宮原先輩はファッションショーで何着るんですか？」
「んー、秘密？」

唇に人差し指をあて、首を傾げる姿に女子生徒の叫びに近い声が爆発した。

「女心鷲掴みにする天才だね」

「沙織、何でそんな平然としてんの」

佳苗さんからは呆れたような声。

「ん？」

「御三家と並んで歩くななんて一生にそう何度もあることじゃないよ？ 羨ましすぎっ！」

「ぐえっ！」

興奮気味な友人にどつかれて、一瞬天国を見た気分になった。

「し、死にかけた……っ」

「和泉さん大丈夫ですか？」

「副会長……」

心配そうな表情で私を見てくれる。

「あ、大丈夫です」

「そうですか」

「あの、ファッションショーの服って決まったんですか？」

私の質問に副会長はふっと微笑む。

「ええ、決まりました。あとはリハーサルで色々調整するだけです
ね」

「へえー……」

「それで和泉さんと上原さんにはスポットライトを担当していただきたいんです。一応そこは関係者以外立ち入り禁止にしていますから」

「良いですよ」

「ありがとうございます」

羽山先輩に裏方に参加しろって言われたんだし、立ち入り禁止なら静かに見れそう。

少しずつ、だけど確実に文化祭は近付いていた。

***11* (後書き)**

読んでくださりありがとうございました♪

何だか人がどんどん片想いしていつてる気が…！

気にせず読んでくださるなら私自身嬉しいかぎりです。

次回もお楽しみに！！

12

森ノ宮祭はそれなりに歴史のあるものらしい。

「さあて男子！ とつとと着替えてもらおうか！」

「お前ら……本気か？」

「当たり前ー。うちの売りはアンタらなんだから」

こんな調子が十分近く続してる。

私はクラスのおとなしい子達とその成り行きを眺めていた。

「あと一時間で開店なんだよ？」

「腹決めてよ！」

「だっ、そんな格好なんて聞いてねえぞ！」

「言ったらやらないじゃん！」

最初から言ってるように、この学校は進学校だ。だから文化祭もまじめなものだと思われがちだけど、そうはいかない。

「うちの高校は行事には全力投球がモットーなんだから」

「しかもユニークな催し物にする伝統があるの、わかってるでしょ？」

今佳苗さんや他の子が言ったように、授業が真面目な分、遊びはとことんふざけようってのが校風。

うちのクラスは男子がメイド服を着る、いわゆる女装喫茶。最初の催し物決めて男子もノリよく女装喫茶を快諾したものの。

「そんなヒラヒラしたの着れるかっての！」

流石にレースとフリルビラビラのメイド服は抵抗がある様子。

気持ちはわからないでもないけど、着なきゃ始まらない。

一日目は生徒だけで、二日目是一般公開。一日目を練習としてやらなきゃ絶対に上手くいかないと思うけど、意見を言うのも苦手だから、ただ見るだけ。

「着れないならばらすよー？」

佳苗さんお得意のアレ。可愛い手帳に書かれた極秘のもの達。

笑顔で脅すもんだから男子はビビってメイド服を頭からかぶった。

「勝利なりっ」

「お疲れ様」

嬉しそうな佳苗さんに労いの言葉を一つ。

私は調理とかの方だからいつも通り制服。ただ上はクラスで揃えたTシャツだけど。

「ファッションショーのリハーサルって昼休みだっけ？」

「あ、うん」

森ノ宮祭一番の目玉とうたわれた御三家のファッションショーは二日目の午後から。

一般のお客さんも来て、かなり盛り上がるらしい。

「羽山先輩とか宮原先輩、ショーで着る服でやるのかな？」

「さあね」

「……興味ない？」

私を見て首を傾げる佳苗さん。

「ん？ 面白そうだと思うけど」

「笑いの対象にするって……沙織の神経がわかんない」

そうかなあ。あの仏頂面の羽山先輩が変わった服着て笑顔振りまくところなんか最高に面白い気がするんだけど。

「絶対沙織惚れるって！」

「はあ……」

曖昧に答えて私と佳苗さんはそれぞれ持ち場についた。

「これからリハーサルを始めます」

凜とした声で言い放ったのは副会長。クラスTシャツも綺麗に着こなして、すらすら指示を出す。

「ね、沙織」

「佳苗さん何？」

「羽山先輩達いなくない？」

言われて辺りを見回せば確かにいない。

背が高いから目立つのに、まったく見当たらなかった。

「御三家はぶっつけ本番だそうです」

「副会長さん」

「羽山先輩がそう言ったんですか？」

あの人なら言いそう。っていうか言う。

「見せたら面白くない、と言われました」

「？」

「たとえリハでも、それなりの人の目に触れさせるのはもったいないと考えたのでしょうか」

その時を思い出すように副会長は静かに話してくれた。

「大丈夫、彼等なら一発勝負も問題ありませんわ」

「副会長さんかっこいいー」

私の横で佳苗さんがはやし立てる。

「沙織さん。貴方ならそれがわかってるんじゃないやありませんか？」

「……」

羽山先輩は、いつも自分らしくて堂々としてて。

「そうですね」

私も先輩なら大丈夫だっと思ったんだ。

「良いなあファッションショー……私も行きたかったあ」

「土産話持って帰ってくるからさっ」

「それならせめて写真撮ってきてよ！」

「あははー」

「佳苗さん、ほどほどにしときなよ……」

午後から仕事のあるクラスメイトの神経を逆撫でした佳苗さんは楽しそうだった。

ホント、良い性格してるよ……。

今日は二日目。つまり文化祭最終日であり、ファッションショー本番でもあった。

「じゃ、頑張ろうねっ」

「うん。後でね」

佳苗さんとは体育館に入ってすぐに別れた。スポットはステージの両脇に設置されてるから一人一つを操作することになっていた。

「あと十五分……」

携帯電話で時間を確認する。体育館にはもう人が集まっていて、湿度が高そうだった。

ステージの前は化粧バッチリの先輩方が陣取っている。

「やっぱ人気なんだ……羽山先輩」

そういえば最近じゃそばにいても当たり前になってたなあ。

「でも、これが終わったら終わりだ」

文化祭まで延長したのは、新しいパシリ探すのが面倒だっただけだろうから。

そう思うと妙に淋しい気持ちにさせられた。

「皆様お待たせいたしました!」

ステージが一気に明るくなった。

ぼんやりしてた自分を奮い立たせてスポットの機材をステージに向ける。

リハーサルで充分流れは練習した。だから問題はない。何も流れを崩すことがなければ。

「ただいまより当文化祭の目玉企画、御三家によるファッションショーを開催いたします!」

司会者の言葉で一気に盛り上がる観客席。

「今回のファッションテーマは貴方が相手に着てもらいたい服です! 事前にとったアンケートを元に、我々生徒会役員が選考しました!」

声を張り上げる司会者に小さくご苦労様と呟いた。

観客はほぼ女子生徒で、御三家の登場を今か今かと待ってる。目なんかギラついててちょっと恐い。

「さあそれでは登場していただきますよう！」

照明が暗くなった。観客の声もだんだん静かになる。

「まずは普段通りの姿を、ですね」

ここで私と佳苗さんがステージの中央にスポットを当てる。
現われたのは白衣を着た酒井先生で。

「最初の登場は理科を担当する酒井先生です。やっぱり白衣が似合いますねえ」

一応ファクションについても司会者はしゃべるらしい。
酒井先生の歩く方向にスポットを当てる。

「眼鏡はオーダーメイドだそうです。いやあ、大人ですね」

歩くのをやめた先生は観客にふっと微笑みかけた。それに会場は悲鳴の嵐で、やんわりと手を振ってステージの袖に消えた。

「続いては、二年生の宮原君です！」

「修平ーっ！」

「こっち向いてえ！」

宮原先輩は少しぼんやりした顔で登場した。まあいつも通りなんだけども。

「えー、宮原君はわりと緩く制服を着るのが好きだそうで、ネクタイもあんまり着けたくないということですよ」

やっぱりどの学年にも人気があるようで、宮原先輩もにと笑って袖に消えた。

「そして、三年間トップを譲っていません！」

その言葉だけで胸の奥が揺れた。スポットを持つ手が汗ばむ。

「三年生の羽山君です！」

「羽山先輩ーい！」

「葵君かっこいい！」

「やー、マジでやばいよ！」

気怠そうな羽山先輩は適当に歩いて観客席を睥んだ。

あーあ、せっかく盛り上がってるのに睥んじやって……。

「見た？ 葵先輩と目があっただけど！」

「え、んなわけないじゃん！ あたしを見たんだよー」

幸せだね、貴方達は。睥んだのを目があっただって言えるんだから。

「羽山君はきっちり着る中にも個性を出すのがポリシーだそうです」

酒井先生や宮原先輩と違って、羽山先輩は笑顔を見せることも手を振ることもなく、ありのままの先輩だった。

「やっぱり笑わなかったな」

羽山先輩にスポットを当てていると、急にこっちを見た。黒い瞳が私を捕らえたんだ。

「っわ……!!」

突然のことにびっくりして、私は機材に隠れた。ばくばくする心臓を抑えるために、何度も深呼吸をする。

その間に、先輩は袖の中へ消えていった。

その後は私服とか、着物とか……いろんな格好の先輩達が入れ替わり現われた。

「さあ、いよいよ最後ですね。ラストは豪華に三人一緒に登場していただきますよう!」

黄色い声が体育館全体を包んだ。

私は一通りの流れが書いてある紙を見て、スポットライトを手にする。

「一番人気が高かったのはスーツ姿です」

コツコツと足音が鳴る。

白いスポットライトを向ければ黒いスーツに身を包んだ三人、御三家が姿を見せた。

「もう無理!」

そう叫んだのは、誰だったんだろう。

女子生徒数人がステージに登ろうと手を伸ばしたんだ。

「ちよっ、やめてください!」

「ずるいよ!」

「私も御三家に近付きたい!」

司会者の制止する声も聞かず、ステージに集まる観客達。

「どうしょ……」

私だってこうなれば混乱する。気持ち焦るものの、体が動かなかった。

生徒会や有志の人が必死になだめる中、当の御三家は何かを話し合っ
って、バラバラに散る。

「宮原君!」

「酒井先生は?」

「羽山君どこおっ?」

慌ただしく観客が騒ぐものの、御三家の脱走ということになんとか
落ち着きを取り戻したらしい。

「良かった……」

「そうか?」

は? 何で貴方がここにいるんですか?

「羽山せつ、んむっ!」

「馬鹿か。声出すなよ」

私の口を先輩の掌がふさぐ。

おかげで何も言えないし、掌が顔に触れてるから恥ずかしいしで、
必死に黙ってることをアピールした。

「もう黙ってるか？」

何度も頷く。それに満足したのか先輩は私の口を解放した。

「はぁー」

「裏方お疲れ」

「……そちらこそ、お疲れ様でした」

終始気怠そうだった羽山先輩はうざったそうにネクタイを緩めた。
そういう仕草もやっぱり似合う。

「購買タダ券分の働きはしただろ？」

「まあ、そうですね」

「しばらくは買うとき楽だな」

そんな優しさですら今は辛い。

「私のパシリが続けばですけど」

「あーそっか」

ポリポリと頭を掻く羽山先輩。

「じゃあ一週間以内に答え出すから」

「……わかりました」

もうすぐ全部が決まる。

不安と期待が入り交じる中で、高校生になって初めての文化祭は終
わりを告げた。

「酒井先生」

教室の片付けも終わり、徐々に帰るクラスメイトがいる中、ドアに笑顔の酒井先生がいた。その目は明らかに私を見てる。
酒井先生の前まできて一言。

「何かご用ですか」

「貴方に知らせた方が良いかと思ひましてね」

「……？」

疑わしい目で先生を見ると、やんわり微笑んで口を開いた。

「帰ってきたんですよ。僕と付き合ってた、葵君の片想いの相手が」

12 (後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

話がぐちゃぐちゃになってきた気が：

なるべくまとまった終り方を目指したいと思います。

えーっと、特にもう紹介すべき登場人物はいません (笑)
まあ出てきたらまた後書きに書きたいと思います。

13

「文化祭じゃ酷い目にあったっすね……」

今日も屋上で喫煙中の俺と修平。

疲れたように呟く修平は女子に追い回されたらしい。

「そうだな」

「何で先輩はそんな平然としてるんすかあ？」

「何でって」

ふと沙織の顔が浮かぶ。意地っ張りのくせに気が小さくて、文化祭は沙織と過ごした時間が一番濃かった気がした。

「まあ、逃げ切ったからな」

俺の呟きと同時にドアが開いた。

自然とそこへ視線を向ける。

「……菜々」

「久しぶりね、葵君」

かつて好きだった女がにこやかな笑みを浮かべて俺を見ていた。一か月しか会ってなかったのに、菜々はもっと大人になった。

「なっ、菜々さんどうして……」

一応顔見知りの修平も突然のことに驚いている。

俺と菜々と酒井の関係を知ってるのは、修平とパシリの沙織だけ。

「修平君も久し振り」

「あ、どうも」

「……何で戻ってきた？」

俺は小さくて呟く。

あんなことがあったのに、帰ってくるのが早すぎる気がした。

「別に？ 葵君に会いたかっただけよ」

不服な顔をしていた俺に菜々は笑って答える。

「っていうのは半分冗談で、明日から教育実習なの」

菜々は昔から教師なんか目指してて、大学も教育関係の勉強をしている。

酒井と付き合ってたから何度となく森ノ宮に来てる菜々はほとんど見慣れてるはずだ。

「……酒井が退院したのは知ってんのか？」

「さっき挨拶してきたわ」

元恋人に挨拶なんてよく出来るな。

菜々らしいといえば菜々らしいけど。

「それじゃ、あたしまだ校内回るから」

ヒラヒラと手を振り、菜々は屋上から去っていった。

「まだ好きっすか？」

「は？」

修平はぼんやり空を見ながら煙草をくわえていた。
唐突に聞かれた言葉に俺は間の抜けた声を出す。

「一応好きな人だったじゃないっすか」

「元だよ元」

それは自分に言い聞かせてるようで曖昧な感情の自分に苛ついた。

「沙織のパシリ、どうします？」

「考え中。気になんの？」

「……少し」

いつもと違う反応に俺は目を細める。
素直すぎる修平は不気味だ。

「どうすっかな」

ひとまず帰ってコンビニで夕飯買うか。

俺は煙草を屋上の床に押し付けて立ち上がった。

「帰ったら何すっかなー」

片手には寮の近くにあるコンビニのビニール袋。
煙草や酒のツマミも一緒に入ったそれを揺らして家路につく。

「先輩？」

聞き覚えのある柔らかい声。振り返ればカバンを両手で持つ沙織が立っていた。

「何やってるんですか？」

「コンビニから帰るところ。お前は？」

俺はビニール袋を見せて沙織に聞く。

「ちょっと図書室に行つて」

「へえ、勉強してんじゃない」

少し褒めると沙織は照れる。頬を赤くするところは新鮮だと思う。
菜々の照れた姿なんか見たことねえや。
帰る方向も同じだから、俺と沙織は並んで歩いた。

「じゃ、またな」

「はい。失礼します」

自分の寮へと歩き出した沙織。その背中が妙に気になって。

「沙織」

「？」

つい呼び止めた。

呼んだだけなんて言えないから、コンビニの袋を漁って沙織に投げる。慌てて沙織はそれを空中でつかんだ。

「……紅茶？」

「勉強のごほーび」

唇の片端をつり上げて笑えば、沙織は嬉しそうに頭を下げて帰っていった。

「普通にときめくдар、これ」

本気でパシリの延長を考えるのは、三年目で初めてのことだった。

14

「帰ってきたんですよ。僕と付き合ってた、葵君の片想いの相手が」
その言葉を聞いた一日、私は放心状態だった。

「やばい。公式が頭に入らない……」

授業中でも酒井先生の言葉が浮かんでは消えて。考えないように思えば思うほどに、私は頭を抱えた。

「どうしたー？ さっきから変」

「あ、大丈夫。なんでもないよ」

佳苗さんから何度心配されても私は必死に笑顔を見せて切り抜けた。
羽山先輩の元好きな人の登場に動揺するなんて、私が先輩を好きみたいじゃないの。

一人で何かを考えると、私はここに来るようになっていた。
気まぐれに本を選んで机に座り、適当にページをめくる。

パシリなんか嫌だった。でも今はないと違和感がある。

先輩のせいで監禁された。でもどんなときでも先輩は助けてくれる気がした。

意地悪く笑う姿も、たまに優しいところも、全部かっこいいと思えた。

「あ……」

偶然選んだ恋愛小説。ふと見つけた二文字の言葉。

「すき……」

そう呟いた途端、急に視界がはれた気がした。

私、先輩が好き？

自覚した瞬間に顔が熱り出す。

周りから見ればそれは明らかに怪しいだろうけど、気にする余裕なんかない。

「帰ろう、うん」

私は逃げるように図書室から出た。

一人帰り道を歩くと風が頬を撫でる。だんだん頭がすっきりしてきた。

その頭で先輩の好きだった人が来ることに気づいて自然とため息が溢れた。

「会いたいなあ……」

無性に先輩に会いたい。そんな願いは簡単に叶うとは思ってなかった。

だけど貴方の後ろ姿を見つけたらどうすれば良い？

「先輩？」

答えは進むのみ。

振り返る人に見間違いはなかった。

「へえ、勉強してんじゃん」

ちょっとした笑顔にも心臓がうるさくなって、好きってことを実感した。

「勉強のごほーび」

羽山先輩に頭を下げて歩き出す。

もらった紅茶を両手で握り締めて空を見上げた。

「かつこよすぎだよ、ちくしょう……」

そこには真っ赤な夕焼けが私を照らしていた。

「遊びにきたよー」

七時を回った頃、お菓子とジュースを持って佳苗さんは私の部屋に現われた。

「珍しいね、いつもなら前もって電話してくれるのに」

それを出迎えてクッションに座ってもらう。

「まあたまにはねー。聞きたいこともあったし」
「？」

私が用意してきたコップにお茶をそそぐ。
それを一口飲み込むと佳苗さんは言った。

「文化祭のとき羽山先輩に会った？」

「げほっ……！」

いきなり何聞いてくるかと思えば……。

先輩の話になるだけで恥ずかしくなってくる。

「顔赤いよ？」

佳苗さんの言葉に両頬を軽く叩く。

「なんもないよ」

「別に嘘つかなくて良いよ」

へらっと佳苗さんは笑うだけ。いつもなら積極的に追求してくるはずなのに。

「何も聞かないの？」

「沙織なら言ってくれるってわかってるから」

貴方はエスパーだよ、佳苗さん。

私はコップを置いて深呼吸を一つ。

「あの、ね」

「うん」

「一ヶ月やってみて、やっぱりパシリは嫌だった」

私は話し始めた。佳苗さんにはちゃんと言おうと思ってたから。

「屋上まで行くの結構疲れるし、酒井先生には監禁させられるし……でもね、先輩と関われたことは良かったって思う」

「それは羽山先輩が好きってことで良いのかな？」

う……聞かれると照れる。

赤く染まる頬を隠して私は小さく頷いた。

「よしよし、素直でよろしい」

「私こんなキャラじゃなかったのに……」

「恋は全部おかしくするものなの！　そんなの当たり前なんだからっ」

きっぱり言い放つ佳苗さん。頼りになるお姉さんに見えるよ。

「応援するから頑張ろうね、沙織」

「……ありがとう」

「うん。お礼といっちゃあなんだけど、明日提出のプリント見せてくれない？」

目的はそれか。

私はカバンを漁ってプリントを探すものの。

「無い……」

「え、忘れたの？」

「取ってくるよ。待ってて？」

夜はまだ涼しいから薄い上着を羽織った。

忍び込むなんて初めてだから、ちよつとドキドキする。

「あたしも行くよ」

「え、でも」

「一人より二人の方が良いでしょ？ ほらほらっ」

佳苗さんに背中を押されながら、私達は夜の学校に向かった。

「あった？」

「うん」

プリントは机の中に入れたままだった。

パーカーのポケットに入れて教室を出ると、佳苗さんが立ち止まった。

「佳苗さん？」

「まだ誰かいるみたい」

指差す先にはぼんやりと蛍光灯の光が廊下に注がれる。

「情報の匂いがする」

「……それどんな匂いよ」

止める言葉を聞き入れない佳苗さんの後について私は灯のついた部屋……職員室に近寄った。

「酒井先生」

「……お久しぶりです、菜々先生」

「まだ実習生ですよ」

甘い香水の匂い。酒井先生はともかく、うちの高校に菜々なんて先生はいない。勿論教育実習生も。

「今から先生方であたしの歓迎会をしてくれるんです。酒井先生も来ますよね？」

「……すみません、今日はちょっと遠慮させてください」

「そうですか。じゃあまた今度ぜひ」

ヒールの足音が近付く。私と佳苗さんは顔を見合わせて職員室の前から壁に隠れた。

「あーあ、断られちゃった」

残念そうに呟いた台詞に似合わない笑顔の菜々という女の人。私の頭に酒井先生の言葉が浮かぶ。

「帰って、きたんだ……」

「沙織？」

あれは酒井先生の元彼女、先輩の好きだった人だ。

***14* (後書き)**

はい、もう大分書きなぐってます。

話が勝手にどんどん進みますから、読んでくださる皆さんにはついてきていただきたいなあ、と思う今日この頃でした。

m 次回も突飛な場面から入る予定ですのご容赦ください m ()

15

「えー今日から一ヶ月間、皆さんと一緒に過ごす麻生菜々（アソウナナ）先生です」

朝の全校集会。校長先生の近くに立つ女性はにこやかに微笑んでいた。腰まである長い黒髪を一つに束ね、歩くとたびにサラサラ揺れる。

「麻生菜々です。教育実習生として来ました。担当科目は英語です。わからないことだらけですが、どうぞよろしくお願いします」

「美人……」

「無茶苦茶可愛いねー」

生徒達はざわざわと騒がしい。それに慣れた様子で菜々先生は平然としていた。

あれが先輩の好きだった人で間違ない。私の直感だけど。

「……織、沙織ってば！」

「なっ、何？」

私は一人遠くにいたようで急に現実に戻る。

「顔恐いよ?。」

佳苗さんが薄く笑みを浮かべている。たぶん私の直感と考えが一致したんだと思った。

「だって……」

横目で羽山先輩がいるはずの三年生の列に目を向けた。でもたくさんいる生徒の中から見えるわけもない。私の気持ちは複雑そのものだった。

「一週間以内に決めるって言われてる」

「もしかしたら初の延長かもよ？」

パフェをつついていた佳苗さんが身を乗り出す。二人はいつものファミレスにいた。

話の内容は私のパシりのこと。

「それはないよ」

「何で？」

アイスを口に頬張った佳苗さんが聞いてきた。

「だって菜々先生が帰ってきたもん」

「それとパシりは関係ないじゃん」

私はケーキを食べる手を止めて下を向いた。気持ちがわかってても積極的になれない自分がときどき嫌になる。

「自信ない」

「？」

「あの人に勝つ自信、ない」

「沙織ー……」

佳苗さん困らせてごめんね。自信ないって言ったくせに、やっぱり羽山先輩のことが頭に浮かぶよ。

先輩、あの人に会えて嬉しいのかな……。それが凄く気になった。

「菜々先生おはよー！」

「おはよう」

生徒からの挨拶に朝から笑顔全開で返す菜々先生。

凄いなあ……。

それを後ろから眺めている私は朝が弱い。だから目が今にも閉じそう。

「おはよ沙織」

「おはよう……ございます」

クラスメイトの誰かと思って振り返ったたら眠気が吹っ飛んだ。

「あれ……やっぱ変？」

金髪から茶髪になった宮原先輩がいたから。

「ど、どうしたんですか？」

「んー？ 金髪も飽きたからね」

髪を一房つまむ姿はなんだか可愛らしい。

「似合ってますよ」

「ありがとう」

私達は互いに微笑んだ。

「修平君」

「あ、菜々……先生」

後ろに宮原先輩がいるのに気付いた菜々先生がこっちに来た。

先生と呼ぶのに宮原先輩は慣れてないみたいで、たどたどしい。

「ごめんね？ 先生なんて呼びづらいでしょ」

何故かわかんないけど菜々先生は宮原先輩の髪色の変化に驚かず、ただ申し訳なさそうに笑った。

「まあ慣れればなんとか……」

「相変わらず優しいのね。その子は？」

菜々先生の目が私に動く。

「あー、葵先輩のパシリ」

「和泉沙織です」

紹介された私は静かに頭を下げた。

「沙織ちゃんね、葵君のパシリか……あの子わがままでしょ。大丈夫？」

「大丈夫ですよ。優しくしてもらってます」

私はニツコリと擬音がつけられるくらい微笑む。
無理矢理笑ってるから口の端が痛いや。

「そっか。……あ、もうこんな時間、二人ともまた学校でね！」

急ぐ用事があるらしく、慌てて菜々先生は去っていった。

「……沙織」

「はい？」

「もしかして菜々さん嫌い？」

「え……」

ふと宮原先輩が呟いた。

仮面みたいな顔を元に戻して横を歩く先輩を見上げる。

「なんか敵意むき出しって感じ」

うあー、思いつきり見透かされてる……。

「だって羽山先輩と酒井先生がいるときに実習生で来るって……タ
イミング良くないですか？」

口をやや尖らせて私は言う。宮原先輩には色々話せて気持ち的にも
助かってる。

「タイミングねえ。俺から見たら妬いてるように見えるけど」

「や、妬いてなんかいませんよ!」

「……はいはい」

宮原先輩が私を複雑そうな眼差しで見ていたことに、気付くことはなかった。

「沙織ちゃん」

「……菜々先生、こんにちは」

昼休み。私は菜々先生に偶然廊下で会った。

「ちょうど良かった。ちょっと話があるんだけど、良い？」

「？」

案内されたのは英語科の準備室。菜々先生はカチャカチャとカップを用意する。

「そこ座って？」

黙って私は言われた通りソファに座る。

あんまり長居したくないのが私の本音だった。

「やっぱり印象悪いか。あんな話聞いてんだもんね」

向かいに座って苦笑いする菜々を見て私はスカートを両手でキツク

握り締めた。

「話って何ですか」

「……単刀直入に聞いわ、貴方葵君と付き合ってるの？」
「は？」

予想外の質問に思わず私は聞き返す。

「だからー、葵君と付き合ってるの？」

「付き合っていないですけど」

「……そ、良かった」

菜々先生はこれでもかってくらい満面の笑みを見せる。

何考えてんだろ、先生……。

その笑みに馬鹿にされたような気がして、睨みそうになるのを必死で抑えた。

「あたしね、葵君のことが好きなの」

その言葉に私は目を見開いた。

「そんな驚く？」

「だ、だって先生は酒井先生のこと」

「うん、酒井先生のこと好き」

「……はい？」

言ってることが理解出来ずに頭の中が真っ白になっていく。
間髪を入れずに先生は言葉を続けた。

「どっちも同じくらい好きなの。だからあたしは両方もらう」

「そ、そんなのおかしいですよ」

「何で？」

「何でって」

上手く答えられずに、私は言葉につまった。

「好きなんだからしょうがないでしょ。今日は二人がどういう関係なのかを知りたかったけど……まだ沙織ちゃんの片想いだったのね」

私は眉を下げて顔をうつむかせる。それは明らかに凶星を表していることも私はわかっていた。

「あたし達ライバルね。でも負ける気ないから、覚悟しててね？」

不敵な笑みを見せる菜々先生に負けた気がした。

「……失礼します」

だからじゃないけど、逃げるように英語科準備室を出ていくことになったんだ。

15 (後書き)

読んでくださり、ありがとうございます。

久々に登場人物の紹介をしようと思います。

まずは春日君ですね。まあそれなりに喧嘩は出来るけど、葵には全戦全敗みたいな子です。

ただお年寄りの方には優しい…みたいな子でいて欲しいです、個人的に。

次に染谷君。力より頭脳で葵に勝とうとするがり勉君の設定です。うーん：酒井先生が高校生だったらこんな感じかなあ的人です。

この二人は主要人物ではありませんね、脇役：助演かな？

話が少しずつですが進んでいます。まだ終わらない予定ですが、気長に読んでください。

16

「何だアイツら……」

登校中、笑いながら一緒に歩く沙織と修平を前方で見つけた。

「おい羽山」

端から見りゃ付き合ってるみてえじゃんか。

女好きのくせに人のパシリまでちょっかい出すなんての。

「おいって!」

「ああ?」

何だよさっきからうるっせえな。

無性にイライラしてきた。

「な……っ、何だよ!」

そこには彩り豊かな髪の方が五人。

低血圧と不機嫌の相乗効果で、かなり鋭い睨みをきかせたせいで相手の勢いがなくなった。

「なんだ春日達かよ……何?」

表情を変えずに聞く。春日ってのはクラスメイトで、気の合わない喧嘩相手の一人。

残りの四人は取り巻きって奴。

「久しぶりに相手してくんね？」

「パス」

質問と答えの間一秒足らず。

相手するのは勿論ケンカのこと、今のところ俺が全勝中。

「は？ 最近おとなしいじゃん」

春日は俺の肩に手を置く。相変わらずなれなれしいなコイツ。

「停学はさすがに困るんでな」

その手を叩いて拒み、俺は答えた。

「おいおい、お前今まで停学くらっても文句言ってなかったじゃねえか。女に説教でもされたか？」

「まさか。飽きただけに決まってんだろ？」

女の言葉でほんの一瞬沙織が浮かんだ。

不敵な笑みを立ちすくむ春日達に見せてさっさと学校に向かう。

「おい、最近葵に身近な女調べとけ」
「わかりました」

春日が取り巻きにそう指示したのを聞くことはなく。

「負けたままじゃ終われねえんだよ」

そう呟いたのも知らないまま。

「あたし葵君のパシリさんに会った」

嬉しそうに菜々は言う。言われた俺は静かに購買のパンを食べていた。珍しく自分で買ったそれはいつもより味が劣る気がした。

「葵君のこと優しいって言ってたわ」

「あっそ」

「今月まだパシリ決めてないんでしょ？ 延長制度もあるって聞いたけど」

ペラペラ勝手にしゃべるところは変わんねえ気がする。

「……そんな話どこから聞いてくんの？」

俺は率直に質問をぶつけた。

「皆が話してくれるの。前に葵君の家庭教師だったって言ったから」

ふふっ、と自慢気に菜々は言った。

開いた口が塞がらない。

「それ言ったんだ」

「うん、ダメ？」

「別に？」

俺は重い腰を上げた。次は体育だからサボる気なし。
面倒な授業だったら確実にサボったな。

「あ、修平君が茶髪にしたの知ってる？」

「……朝見た」

仲良さそうに話す二人が頭に過ぎった。

それを消すように煙草をくわえ、ライターで火をつける。屋上は風があるからでライターの火を揺らさないように手で覆い隠す。

「あれね、あたしが勧めたんだよ」

「茶髪を？」

「ううん、決心したら何かで表すと良いよーって」

俺の吸ってた煙草を取り上げて菜々は自分の口に運ぶ。煙を旨そうにくゆらせ、続きを話した。

「相談されたの。大勢の女の子より、一人を大事にしたくなった、って」

「あの修平が？」

自然と胡散臭そうな目になった。修平はそういうキャラじゃねえかな。

でも行動で示してることを思い出して、本気だと気付く。

「初めて年下に惹かれたんだって」

「年下？」

「わからない？ 沙織ちゃんのことよ」

「……へえ」

俺はそれしか言えなかった。また煙草を吸おうと制服のポケットをあさる。

「葵君がもしパシリの延長をしないなら、修平君はパシリとして頼んでみようかなって言ってたわ」

無言で煙草をふかす。

たまにこれが精神安定剤に思える。

「若いって良いね。真っ直ぐで不器用で」

「自分だって充分若いだろ」

「あたしの生き方は歪んでるよ。葵君、どうするの？」

ま、そう簡単に俺のパシリは譲らねえよ。

吸い殻を足で踏み潰して俺は屋上から出ていった。

「相手に不足なし、ってところかしら？ ……沙織ちゃん。」

潰れた吸い殻を拾い上げ、不敵な笑みを浮かべる。

それをゴミ箱へ捨てて彼女も屋上をあとにした。

「葵先輩」

屋上を出てしばらくしたら修平に会った。

「修平か。何だよ、顔恐えぞ？」

「先輩パシリ延長するんすか」

射るような視線で俺は睨まれる。

あんまり恐くはないが修平が怒んのは結構珍しい。

「まあな。沙織が側にいたら飽きねえし」

「アイツ……沙織のことどう思ってるんすか？」

アイツ呼ばわりかよ。

「お前沙織のこと好きなんだ？」

「悪いっすけど、俺それは譲りませんから」

そうはつきり呟いて修平はその場を去った。

「……勝手にしろっての」

残された俺はため息を吐き出した。

17

「それって二股ってこと？」

「たぶん。ねえ、佳苗さんはどう思う？」

教室に戻ってすぐ、私は菜々先生とあったことを佳苗さんに全部話した。

「二股の是非か？」

眉間にシワ寄せ、真剣な表情で佳苗さんが尋ねる。

「好きなものを全部得ようとする……かな」

「そりゃあダメでしょ」

「どうして？」

「決まってるじゃん。全部得ちゃったらつまんないもん」

佳苗さんがグイッと身を乗り出した。

「いーい？ 嫌いなものとか苦手なものがあるから人生に変化があるのよ」

いつの間にかシャープペンを空中に振って熱弁している。

「好きなものばっかりの世界だって、いつか飽きるだろーしね」

「……佳苗さんってさ、頭良いのか悪いのかわかんないよね」

自分より大人な人生観を持つ佳苗さんに私は苦笑する。

「あたしは事実を言ってるだけさ。それより、宣戦布告されちゃったなんてね」

「うん、びっくりした」

「沙織自信ないって言ったわりにライバル視されてんじゃん」

ニツと佳苗さんは笑った。

「あー、買いかぶってるよね」

「もう少し前向きになろうよお」

「沙織ちゃん、来てるよ羽山先輩！」

クラスメイトの女の子に言われて私は勢いよく入口を見た。

羽山先輩は私が入学してから初めて会ったときとほとんど同じ場所に立っていて。

「どうしよう」

緊張して動けない。

不安げな表情で佳苗さんを見た。

「迷う必要ないでしょっ。行ってきたさい？」

いつもの佳苗さんの笑顔。それにほっとした私は教室の外に向かった。

「せ、先輩」

早速もったよ、恥ずかしいなあ……。

わざわざ私の教室まで来てくれたことは嬉しいけど、周りの視線が物凄く痛い。

「よ。パシリのことなんだけどさ、もう一ヶ月やる気ねえか？」

瞬きを三回。頭の中で先輩の言葉を整理する。
クラスがざわつく。

「それって、延長ってことですか？」

「まあ沙織が嫌じゃないならな」

嫌なわけではないじゃないですか。

「やります」

私はすぐに返答した。ふっと羽山先輩は笑って軽く私の頭を叩く。

「んじゃあ、明日からまたよろしくな」

「……はいっ」

席に戻ろうとすると、一瞬だけ複雑そうな表情で佳苗さんが見ていた気がした。

「沙織さん、好きってせっかく自覚したのに何も行動しないわけですかー？」

「……行動って？」

「決まってんじゃない！ デートさ！」

バシバシ私の机を叩く佳苗さん。もしかしたら私自身より頑張ってくれてるかもしれない。

「無理」

「何で？」

「だって私パシリだし」

デートなんて考えたこともないよ。って言えば、佳苗さんが口を尖らせる。

「その壁を越えたいんでしょーが」

「うーん……今のままでも幸せなんだよね」

伏し目がちにポツリと呟く。

パシリを延長してもらえたってことは、私にもチャンスがあるってわかるから。

「そんな悠長なこと言って良いのー？ 菜々先生に取られちゃうよ？」

気の小さい私を脅さないでよ……。不安になってきた。

でも携帯電話に入ったメール一つで、私は大きく左右されるようで。

「先輩からだ」

好きな人からだ と頬がゆるむ。

「良いねー幸せそうで」

「まあ、ね」

携帯を開いてメールを見ると、私のさっきまでの笑顔は一瞬で消えた。

「……沙織？」

怪訝な表情で佳苗さんが私の携帯を覗く。

「何々……今日はタマゴサンド買ってきて。菜々の分も、って……まさか先生のこと？」

不安そうに佳苗さんが私を見た。

「購買行ってくる」

「先生の分も買う気なの？」

「……先輩がそれを望むのなら、叶えるしかないじゃない？」

力ない笑顔を見せて私は教室から出ていった。

「先輩」

いつものように屋上に行けば、珍しく煙草の吸い殻の山が出来てた。

「沙織？」

私が近付くと羽山先輩は不思議そうに瞳を丸くする。
そんな姿にも胸が苦しくなってる自分が悲しくなる。

「今日、タマゴサンドですよね？」

気持ちに気付かれないように伏し目がちに紙袋を差し出す。

「……タマゴサンド？ 俺頼んでねえよ」

「だ、だってメールが」

「メール？ あー、悪い。さっき菜々がいじってたわ」

「あ、そうなんですか……」

心臓が痛い。先輩の一挙一動で私は死ぬかもしれない。

「どうした？ 何かあったか？」

「いや、全然大丈夫ですよ」

背中を曲げて私に視線を合わせた羽山先輩はじっと私の顔を覗き込む。慌てて私は顔を伏せた。

か、顔が近いすぎる……！

自分の頬に熱を持つのが嫌でもわかった。

「ふーん……なんかあったら言えよ？」

先輩の顔が離れた瞬間、私はあるものに鼻孔をくすぐられた。

「ありがとうございます。私そろそろ失礼しますね」

軽くお辞儀をして足早に屋上から出ていった。

「っていうか呼び捨てかよ……先輩の馬鹿」

溢れそうになる涙を手で無理矢理拭い、私は購買の袋を片手に英語科準備室に向かった。

「失礼します」

「お、和泉。何か用か？」

英語科準備室には私のクラスの担任がいた。まあ英語教師だからだけだ。

彼は森ノ宮高校の古株で、生徒からも定評があるらしい。

「菜々先生に話があるんです」

「あーちよっと待って」

そう言うとは先生は仕切られている奥の方に進んだ。

「先生、うちのクラスの和泉が話があるそうですよ。ずいぶん人気ですねえ」

「沙織ちゃん、これから校内を案内してくれるんですよ」

嬉しそうに言う菜々先生。私はぐっと拳を作った。

「へえー、和泉がねえ」

微笑ましい私の会話も今は苛立たしくて。

私はただうつむくことを選んだ。

「行きましようか沙織ちゃん」

「……はい、先生」

その時の笑顔は、お互いに仮面をつけたようだった。勿論それに気づいてるのは当然同士のみ。

「話って何かしら」

「これ」

人通りのない廊下の真ん中。まだ暖かい購買の紙袋を私は押し付けるように菜々先生に手渡した。

「買ってきてくれたんだ」

「先輩の携帯電話で勝手にメール送ったんですね」

自然と目が細くなり、睨むようになる。

騙されたことが腹立たしかった。

「やだ、そんな怒らないでよ」

「別に怒ってません」

冷たい声で返す。

一息吐き出した菜々先生は吹っ切れたようで。

「あんまり子供だと葵君に嫌われるわよ？」

「先生に関係ないでしょう？」

「ライバルだから関係あるわよ。それにしても……葵君のお願いならライバルにもパシられるのね」

私は頬から耳まで真っ赤にした。

屈辱的としか言い様がないけど、言い返すことも出来なかった。

「葵君、優しいのよ。昔から困ってるとあたしを助けてくれるの」

自慢気に菜々先生は話し続ける。

「一年前にあたしは葵君の家庭教師を始めたの。その頃から彼、頭良かったからそんなにはあたし仕事してなかったんだけどね」

廊下の窓を開けて外を見つめる菜々先生。私も同じように目を向けると男子数人が校庭で走り回る姿が見えた。

「あたしの恋愛も応援してくれたし、進路のアドバイスも結構的確だったし」

私は黙って話に耳を貸す。必死に聞き流そうとしてもそんなこと出来なくて悲しくなった。

「あたしと葵君にはそれだけ長い絆があるの。それに」

そこまで言って菜々先生は言葉を切った。浅いため息を一つ吐いて、口を開く。

「パシリの延長だって、あたしが言ったんだもの」

その言葉に私の瞳が揺らぐ。

もう先生の顔も視界が歪んで見えない。

「これ、ありがとう。後で食べさせてもらうわ」

優越感に浸っているのか、菜々先生は颯爽とその場から去った。私はしゃがみ込んで、辛い感情や涙が過ぎ去るのを待つしかなかった。

18

「宮原先輩！」

「……佳苗さん？」

人の少ない学食。この学校のだいたいの人間は購買で済ませているからだ。

佳苗は笑って頷き、修平の横に座る。

「先輩も今からご飯ですか？」

皿の中身を見れば、カレーライスのルーが少し残っていた。

「食べ終わったとこ。今日は沙織と一緒にじゃないの？」

「沙織はパシリ延長になったんであたしは先に場所とりです」

「……そっか」

修平はどこか悲しそうに笑った。

少しでも視線を泳がせて佳苗が口を開く。

「ショックですか？ 好きな人が他人のパシリなんて」

「……何で知ってんの？」

「たくさんの女の子と別れて、できるだけ女の子に近寄らなくなっ
たって噂で聞いたのに、沙織には普通に接してるみたいでしたからねー」

「恐いなあ、その観察力」

困ったような笑顔を見せる修平。

沙織から何度かお互いの話を聞いてるため、大体のことは理解してるようだ。

「安心してください。あたししゃべったりしませんから」

「そう？　じゃあ口止料に今度学食おごるよ」

「……ありがとうございます」

佳苗はにっこりと微笑んだ。

「佳苗さんっ」

「沙織ー、こっちだよ」

佳苗は手を振って自分の位置を示す。

それとほぼ同時にトレーを持って修平は立ち上がった。

「じゃ、俺行くわ。……佳苗さん」

「はい？」

「俺のこと、葵先輩に言った？」

「いいえ。心当たり、あるんじゃないですか？」

修平は少し考えて何も言わずにどこかへ行ってしまった。

「今の……宮原先輩？　何かあるの？」

「さあ？」

不思議そうな沙織の横で佳苗は肩をすくめるしかなかった。

「菜々さん」

「修平君、どうしたの？」

辛い英語準備室には菜々しかいなかった。

勢いよくドアを開いた修平は菜々の座っているソファに歩み寄る。

「先輩に何言ったの？」

「ちよつとつっついただけよ」

楽しんでいるような笑みを含めている菜々。

「……？」

意図がわからずに目を薄くする修平。

「あたしは対等の立場からライバルを突き落とす主義なの。だから沙織ちゃんにもそれなりに良い思いしてもらわなきゃ」

「そういうの、悪趣味っていうんですよ？」

さり気なく間違いを正そうとしたものの。

「良いのよ、あたし歪んだ人間だもの」

修平の意図に気付いていない菜々はぬるくなったコーヒーを飲む。

「修平君。もし葵君があたしを選んだら、沙織ちゃんを慰めてあげてよ」

「言われなくてもそうしますよ」

きっぱり言い切って修平は準備室から出ていった。

残された菜々は相変わらず楽しげな笑みを浮かべていた。

「酒井先生。今日、夕食と一緒にしませんか？」

普段上げてる髪を下ろし、メイクもバッチリ。そんな菜々は最上の笑顔で酒井に言った。

「すみません、これから授業のプリントを作らないといけないんです」

「それなら待ってます」

笑顔が変わることはない。それを見た酒井は苦笑した。

「遅くなりますよ？ ご飯なんてとても……」

「構いませんよ。あたしの知ってるお店は遅くまでやってますから」

「……わざとですか？」

「何がです？」

不敵な笑みを見せる菜々。厳しいまなざしで酒井が見つめる。

「断ってることくらいわかるでしょう」

そこまで言い切って酒井は一息おいた。そして続きの言葉を言う。

「あなたならば」

「あなたなんて言わないでください……！」

菜々が声をあげる。

「……友喜さん」

「夜といってもここは学校ですよ？ 菜々先生」

酒井は静かに言葉を返す。ムツとした菜々が足早に部屋から去ろうとする。

「あまりあの二人に干渉しないでくれませんか？」

後ろから酒井の声がかかる。

「あの二人？」

くるりと菜々は踵を返す。

「葵君と沙織さんのことです」

「それはあたしの勝手です。……失礼します」

冷たく言い放ち、菜々は出ていった。

「相変わらずですね」

酒井はポツリと呟いてプリント作成中のパソコンに目を向けた。

19

「何なんですか一体」

私は不機嫌だった。

何故かという、今置かれているこの状況が原因で。
場所は体育館。時刻は夜の八時を過ぎたあたり。私は椅子に座らされ、ロープでぐるぐるに縛られた。

「別に何もしねえよ。俺らが用があるのは羽山の方だからな」

ニヤニヤと意地汚い笑みを浮かべる数人の男子生徒。見たところ先輩っぽい。

うーん。何でこうなるかな……。

二時間前、帰ろうとして下駄箱へ手を伸ばすとその手を捕まれた。

「え？」

「和泉沙織サン？」

見知らぬ男子生徒。私は警戒しつつ頷いて肯定した。

「ちょっと付き合ってね？」

最後に見たのは異様に目をひく口のピアスだった。

「っていうか、どなたですか？」

「……春日竜！ 羽山のことが大っ嫌いな男だよ」

呑気にそんなことを聞いてる場合じゃないけど気になって。
そうしたら苛立ち気味に春日先輩が答えた。

「嫌いなら先輩に用事なんて作らなきゃ良いじゃないですか」
「この前さー、羽山に喧嘩誘ったんだよね」

私の発言をさえぎり、春日先輩は大声で話し出した。
人の話は最後まで聞こうよ。

「そしたら断られちゃった」

縛られている私の顔の真横を春日先輩の拳が通りすぎる。それは壁にぶつかり大きな音を出した。

「お前あいつに何言ったわけ？」

殺意の籠った瞳。私は背筋が凍りつくのを感じた。
本気で怒っていらっしやるよ……。

「黙っててもわかんねえんだけど？」

「春日ー、あんま顔近づけんなよ」

「明らかにビビってんじゃん」

春日先輩の仲間達が笑いながら言う。

「ま、いいや。和泉沙織サン、携帯借りるよ？」
「ちよっ……！」

いつの間に私の盗ったのよ！

春日先輩の手には私の携帯電話が握られていた。無論私の制止をきくわけもなく、春日先輩は勝手にどこかに電話をかけはじめた。

「あ、羽山ー？」

先輩の名前だけで肩が跳ねた。

よりによって羽山先輩か……まあ当たり前なんだろうけども。

「おいおい、ずいぶん冷たいなあ。今ちよっと集団デート中なの」

こんなデート絶対に嫌だ。

「説明しづらいから写真送るわ。」

そう言って電話を切った春日先輩は私に携帯電話のカメラを向けた。

「流石に助けに来んだろ」

「正義感の塊みたいな奴だからな。来たらどうすんだ？」

「決まってるだろ？ ボコス」

……物騒な会話。

羽山先輩がこういう世界にも絡んでるのはわかってたけど、私にはやっぱり……怖い。

「和泉サン」

「……？」

「アンタ良い餌かもね」

揺らす携帯電話のディスプレイには“羽山先輩”の文字。

「もしもーし」

軽い調子で出た途端、顔をしかめる春日先輩。

「そう怒るなって。今パシリに替わるからー」

私？

戸惑っていると春日先輩が私の耳元に携帯電話を近付けた。

「何かしゃべれ」

「っ、もしもし……？」

「沙織？ 大丈夫か？」

情けないけど、泣きそうになった。

あんまりにも羽山先輩が心配してくれてるから。だからこそ、関わったらダメだと思った。

「……先輩、お願いがあります」

そういえば改まってお願いするなんてなかったな。

「心配すんな、すぐそっち行く」

「違うんです。来ないでください」

「……何言ってるんだ？」

予想外の言葉だったみたいで、電話越しにも珍しくうろたえる羽山先輩がわかった。

「私のパシリ最後のお願いです」

「パシリ最後って何だよ」

「……ごめんなさ」

一方的に電話を切られた。勿論それは春日先輩で。

「お前何言ってくれんの？」

額に血管を浮き上がらせる勢いで怒っている。

でもこれで先輩は来ない。喧嘩しないですむことが私の脳裏に浮かんでいた。

「私と先輩に関連はなくなりましたよね。帰らせてください」

いつものペースを取り戻した私は真直ぐ春日先輩を見据えた。

「あんたずいぶん落ち着いてんじゃん」

今まで隅に座って眺めていた男の先輩が言う。よく見ればサラサラの黒髪で眼鏡をかけた優等生だった。

明らかにこの集団とは違う雰囲気先輩。

「おい染谷、客観的に見る暇があるなら何とかしろよ。学年二位の頭だろ？」

思い通りにいかない怒りから、春日先輩は煙草に手を伸ばす。

皆肺がんで死にたいのか……？

「アイツは来るよ。あんなふうに言われたら余計来る」

優等生、染谷先輩の言葉に私は少し肩を落とした。彼の言うことは間違っていないからだ。

これじゃ来ないでって言った意味ないじゃん……。

「それより気になるのは何で君が落ち着いてるかってこと」

「人より神経図太いんです」

私は無表情の染谷先輩を睨みつけた。
監禁経験してるからなんて絶対言えない。

「ふーん、面白いね。さすがパシリ延長されただけあるよ」

「もう私、パシリじゃないんです」

そんな掛け合いが続くかと思われたその瞬間、体育館の扉が開いた。

「これは一体何の騒ぎですか？」

「……酒井先生？」

私達の前に現れたのは酒井先生だった。

「羽山より先に先公かよー」

「先生ー、これからパーティーなんです、邪魔しないでもらえます

かー？」

「それなら男子だけでやりなさい。その子は連れて帰ります」

酒井先生の目は明らかに私を見ていた。
ほっとして何も言えそうにないよ。

「えー、それじゃ盛り上がらないし」

「あんまりワガママ言うとか投げ飛ばされるよ」

ふざけている春日先輩達に冷たい一言を言い放つ染谷先輩。

「染谷君…どういう意味？」

先輩の一人の問いに染谷先輩はニヤリと笑みを見せた。

「先生は確か合気道が特技なんですよね？ 黒帯の腕前だとか」

「へえ、よく知ってますね」

酒井先生は表情を変えない。柔らかい笑みはどこことなく二人とも似てた。

周りの人間は話についていけずポカンとその様子を見ているだけ。

「さて…彼女は帰らせます。よろしいですね？」

有無を言わせぬ酒井の態度に私を餌にした人達はなす術なし。

染谷先輩も我関せずのようでは止める気配はなかった。

「来なさい」

「あ、はい……」

いつの間にかロープをほどかれ、酒井先生のあとに付いて私は体育館を出ていった。

「あの」

「ずいぶん大変ですね、パシリになってから。数人の男子生徒に捕まったり……僕に監禁されたり」

私の声は小さくて届かなかったのか、酒井先生は私に背を向けたまま言う。

「そうかもしれませんね」

私はうつむいたまま答える。
自分が馬鹿に思えてきた。

「でも、もうそれも終わりです」

そう言うと酒井先生が私に向き直った。不思議そうに目を薄くして。

「なぜです？」

「さっき、電話でパシリを辞退させてもらいました」

夜の学校の廊下は静寂に包まれていて、私と先生の声だけがそれを破っていた。

「さっきのことで、怖くなったんですか？ 葵君に関わることで」

酒井先生の問いに私は首を左右に振る。

「そばにいるのが、辛くなったんです」

いつにも増してか細い声。私もこんな弱くなることがあったんだ、なんて他人事みたく思う。

「菜々先生ですか？」

「酒井先生は何でもご存知なんですね」

私は薄く笑みを浮かべるしか出来なかった。

「あの二人の間に、私の入る隙はないんですよ」

「……寮の近くまで送りますよ」

20

嫌な予感があった。沙織ならこんな時間に電話なんかしねえし。

「春日の野郎……」

暗い部屋で沙織が縛られているのが目の前に飛び込んできた。画面上だから表情はわからないが、こんな状況だ。誰だって怖えよ。俺は舌打ちして電話をかける。勿論沙織の携帯に。

「お前何やってんの？とうとう犯罪に手え出すようになったのかよ」
早口でまくしたてると巨体の春日が沙織に代わるつつって動く音が携帯を通して聞こえる。

「私のパシリ最後のお願いです」

微かに震える声は沙織以外の誰でもない。
でも言われたことに俺は一番動揺した。

「ごめんなさ」

一方的に電話を切られた。意味わかんねえよ……。

「パシリ辞めるってことかよ……くそっ」

俺は小さく呟いて体育館に走った。

「残念だね羽山君、人質はもういないよ」

息切れした俺を迎えたのは沙織じゃなかった。

「染谷？ 何でお前までいんの？」

染谷とは一応クラスメイト。つまりそれなりに顔見知り。

「勿論、春日君達と君の喧嘩を観戦に」

綺麗に笑顔を作る染谷。どうでもいいがコイツも裏じゃモテるらしい。

「あっそ。沙織は逃げた……わけねえか、あんだだけ縛られてんだから」

「酒井が来たんだよ」

「酒井？」

俺らの間に割って入る春日。拳を軽く鳴らして既に臨戦体制ってところか。

「たぶん最終点検の先生だったんだろうね。まあここに明かりがついてるんだから来るのは誰でも当たり前だろうけど」

論理的に話するのが好きな染谷らしい解説。

「染谷、お前それ気づいてて言わなかったの？」

一気に染谷に敵意が集中する。

俺の存在無視かよ。

「いや？ さっき気づいた」

あっけらかんと言う染谷を見て、春日達は盛大にため息をつく。

「もういいや、羽山来たし。なあ、ここまで来たらやることは一つしょ？」

「……良いぜ。でも一個質問」

制服の上着を脱いでネクタイを緩めた。運動の邪魔だろう？

「質問？」

「うちのパシリは無傷か？」

むかつくがこれはここにいた人間しかわかんねえことだ。

「お前が来なかったらちよつと遊ぼうかとは思ってたけどな」

「顔悪くはねえし」

ニヤニヤすんなよ気持ち悪いな……苛ついてきた。

「つまり、彼女は無傷ってことだよ」

染谷が決定的な答えを言った。

「あっそ」

「お前あの女気にしてんの？」

「元パシリだからな」

お前らみたいなのが沙織に近付いていいわけねえんだよ。

パシ리를理由に逃げたが、無事で良かったと本気で思った。

「始めるか。……言っとくけど、俺今すげー不機嫌だから手加減なしな」

不敵な笑みを浮かべ、俺は拳を鳴らした。

昼間なら生徒が動き回るはずの体育館。

太陽が消えればそこは赤い液体が床を汚す。

「派手にやったね」

さっきまで普通にしゃべってた奴らが血だらけで転がってるこんなときでも冷静な染谷。

「お前のその神経には尊敬する」

「そう？　じゃあ尊敬ついでに一つ言っておくよ」

ずれた眼鏡をかけ直す指は女の手みたいだった。

「次の試験は負けないから」

染谷は冷たい笑顔を見せる。

「今まで俺に勝ったことねえのによく言うな」

「人は日々成長するものだよ。ハンデもついたしね」

「ハンデ？」

「今度の停学は何日だろうね」

綺麗に笑う計画犯。はつきりした態度に清々しささえ覚える。

「良い性格してるよな、染谷って」

「初めて言われたよ。悪いけど俺は自分の力を最大限に使うから」

品行方正な染谷だから、多少のことも誤魔化せば教師が簡単に信じる。

「それじゃ、また明日」

楽しそうに染谷は帰っていった。

俺は舌打ちを一つして外に向かった。保健医を体育館に呼び出してから。

21

「葵君が心配ですか？」

酒井先生の車の中。外をぼんやり眺めていた私に声をかける先生。
無論その視線は前方を見つめていて。

「まあ」

「今頃喧嘩の真っ最中でしょうね」

羽山先輩の姿が浮かぶ。

「戻ってください」

「それは出来ませんが、心配することはありませんよ」

私を見ることなく、酒井先生はクスリと笑う。

「ちよっ、何ですか？ 六対一じゃ明らかに勝ち目なんて」

「聞きましたよね？ 僕は合気道の有段者だと」

私は静かに頷く。

「僕は葵君に病院送りにされたんですよ？」

「……あ」

酒井先生は羽山先輩にボコボコにされたんだ。今までそれを忘れていた私は小さく声を出して反応した。

その様子を見て酒井先生はまた笑みを溢す。

「それに葵君は喧嘩で負けた経験が無いらしいですから」

「でも喧嘩がバレたら……」

「学年トップですから退学はないですよ。うちは成績第一ですから」

少し安心した。成績第一っていうのはちょっと悲しい気もするけど。

「そんなに喧嘩が嫌いですか？」

「え……」

「以前、僕があなたを監禁して葵君が助けに来たときも喧嘩を嫌がってましたね。何か理由があるんですか？」

しゃべらない理由もない。

私は重い口を開いた。

「ねえ知ってる？ 昨日の夜羽山先輩が喧嘩したらしいよー？」

佳苗さんは早くも情報を手に入れて私に伝えてくれた。

「……うん」

それが今は少し辛い。無理矢理笑ったけど違和感あるだろうな。

「どうした？」

「？」

「変すぎだよー、また何かあったんでしょ？　言ってみなさい。」
「佳苗さんには敵わないね」

苦笑した後、私は昨夜のことを全部話した。

「……ホントに？」

「うん、春日って先輩とか染谷先輩とか……」

「そうじゃなくて！　本当にパシリ辞めたの？」

「ああ、うん」

私よりも佳苗さんの方が熱くなってる。

「菜々先生に譲っちゃうわけ？　そんなの……」

「あの二人には絆があるし、一ヶ月くらいで知り合った私には勝ち目なんてないから」

もっと深く突っ込みたそうな顔を佳苗さんはしてたけど、ぐっと抑えた。

「先輩は何て言ってるの？」

「さあ……？」

「さあ、って」

「返事聞く前に電話切られたんだもん」

でも羽山先輩から返事を聞くのも怖かった気がして、切られてどこかほっとしたんだ。

「後悔しないなら、あたし止めない。次移動だから行こ？」
「うん」

その日私がパシリの仕事を放棄していることに周りが気づき、パシリ終了の噂は瞬く間に広まった。

「沙織！」

「何？ 佳苗さん」

「羽山先輩一週間停学だって！」

「停、学？」

自然と声が震える。

「やっぱり昨日の喧嘩が」

「ごめん、先帰る！」

「あ、ちよつと沙織……！ もーやっぱ気になるんじゃない。嘘つき
ー」

「勢いで学校を出てきたけど……どうしよう」

沙織は一人町の中を歩いていた。

私先輩のこと何も知らないんだ。どこにいるかもわかんないや。

「ゲホッ！！」

「ウッ……！！」

「……え？」

コンビニの裏で鈍い音とうめき声が聞こえる。
こういうときの直感って当たるから嫌になるよ、まったく……。

「なんだ、此処で一番強いって言った割りにはそれほどでもねえな」

羽山先輩は特に疲れたそぶりも無く、ひょうひょうとしている。
周りには倒れている傷だらけの同い年くらいの男の子が三人。
予想通りの光景について頭を抱えてしまった。

「デメエ……」

「その制服、森ノ宮だろ？ 進学校の生徒がこんなこととして良いと
思ってるのかよ……っ」

うめきつつ男達は毒づいた。

よく見れば森ノ宮に因縁をつけてくる高校の制服で。

うちの学校で最悪の人に絡んだな、と思ってしまった。

「それ脅し？ 元気あんな。その方がやりがいあるけど」

満面の笑顔になる葵。男達の顔が真っ青になった。

「死にたくねえなら、十数える間に俺の前から消えろ」

羽山先輩は男の子の胸ぐらをつかんで睨みつけた。

「いーち……にー……」

「うわあああっ！」

数え始めると同時に三人は逃げ出した。

「つまんねえの」

それを見届けてから塀に寄りかかって煙草に火をつけた羽山先輩。

「肺ガンで死にますよ」

「っゲホッ……！」

突然声をかけたせい、煙草の煙が変なところに入ったみたいで羽山先輩は咳き込んだ。

「ゲホッ、ウエツ……」

「大丈夫ですか？」

あまりの苦しさにしゃがみ込んだ先輩の目線にあわせ、私も一緒にしゃがむ。

「おま……っ、何でここ……」

まだ苦しいのか言葉が途切れ途切れ。

「帰ってたら喧嘩してる声がして。……もう終わったみたいですけど」

私の言葉に羽山先輩は何も言わなかった。

「何で喧嘩したんですか？」

「向こうが俺にカツアゲしたんだよ」

「今のことじゃありません。昨日のことです」

射るような目で先輩を見る。先輩は所々顔に怪我をしてて、自然と眉間にシワが寄った。

「ちゃんと言ったじゃないですか、来ないでくださいって……」

「お前には関係ねえだろ。もうパシリなんかじゃねえんだから」

煙草を足で踏み潰し、羽山先輩は立ち上がった。自然と私はそれを見上げるようになる。

「そうですけど……停学になったって聞いて気になって……」

最後の方の言葉はだんだん小さくなって聞こえなくなった。

「同情ならいらねえんだよ」

冷たく言い放って羽山先輩は私に背を向けた。

「こういうところ、危ねえからもう来んな」

わしゃわしゃと私の頭を撫でて、先輩は帰っていった。

「同情なんか、してないです……」

顔をうつむかせ、私は一人呟いた。

触れられたことが遠い昔に思えて、私は無性に悲しかった。

「あたし上原佳苗は、宮原修平先輩が好きです」
「……へ？」

それが私と羽山先輩が話してた同時刻にあったことで。

「……告白した？」
「そー」

私の部屋で紙パックのジュースを飲みながら佳苗さんから聞いたときは開いた口が塞がらなかった。
その様子に佳苗さんはぷつと笑いだして。

「いや笑い事じゃないから！　ねえ……誰に？」
「修平先輩」
「……宮原先輩？」

佳苗さんが小さく頷く。

「返事は」
「断られたー。好きな人いるってさ」

口を尖らせて佳苗さんと言う。
綺麗に巻いた髪を指に絡めて気を紛らわしてるように見えた。

「そうなんだ……」
「でもね、あたし諦めないって言ったの。修平先輩も片想いだから。それで宮原先輩じゃなくて修平先輩って呼ぶことにしたんだ」

そう言い切った佳苗さんの表情はどこか晴れ晴れとしていて羨ましく思った。

「ねえ、いつから好きだったの？」

「入学式のときから。中庭で迷ってたら案内してくれたの」
「そうだったんだ」

私の知らないところでもちゃんと世界は回ってる。当たり前のことだけど、そう実感した。

「……これ」

「？」

差し出されたのは綺麗に折り畳まれた一枚のメモ。

「あたしがいなくなってから見てねー？」

そう言って数分後佳苗さんは自分の部屋に帰っていった。
残された私は言われた通りにメモを開く。

「……っ」

立ち上がった瞬間、テーブルに無造作に投げ出されたメモがヒラリと床に舞い落ちる。

『明日の昼休み、屋上で話したいことがある。来るまで待ってるから。』

宮原修平』

それは明らかに宮原先輩の気持ちがわかるもので。

「どうしてこうなるのかな……」

私は天井を仰いで小さく呟いた。

佳苗さんに会いづらいな……。

私はため息をつく。悩み過ぎて昨日は眠れなかった。クマが出来て最悪な状態。

「沙織」

後ろから呼ばれて振り返る。

「佳苗さん……」

「おはよー」

「お、おはよう」

どう接したら良いかわかんなくて、目もあわせられなかった。

「普通にしていーよ。ちゃんとわかってるから」

「え？」

どういうこと？

平然としてる佳苗さんに首を傾げた。

「んー、前から知ってた。先輩の気持ち」

「……ごめん」

頭を下げる。申し訳なさでいっぱいだった。

周りの気持ちに気付けないで、私は自分のことばかり。

「何謝ってんのさー。沙織が悪いわけじゃないんだから！ それよ
り、ちゃんと修平先輩に会ってね？」

「……うん」

その後は、なるべくいつも通りでいられたと思う。

「宮原先輩」

「よ」

私が屋上に来たとき、宮原先輩はもう立っていた。

「来ないと思った」

「……佳苗さんと、約束したから」

「そっか」

宮原先輩は一瞬驚きの表情を見せたもののすぐに元に戻した。
互いにうつむいて沈黙が流れる。風が少し吹き始めた。

「俺、沙織のこと好きだ」

顔を上げて、先に沈黙を破ったのは宮原先輩だった。

「ごめんなさい私……」

「言わなくて良いよ。ちゃんとわかってるから」

「……？」

「沙織が見てるのは葵先輩だろ？」

動揺して目を泳がせる。

「俺はこの一ヶ月半ずっと葵先輩という沙織を見てきた。真面目で人の心配ばっかして…なんかほっとけなかった」

私は何も言えなくて、宮原先輩の顔を見つめるだけ。
先輩は話を続けた。

「見てたから、沙織の気持ちくらいわかるよ」

「ごめんなさ」

「謝らないで」

修平は沙織の言葉をさえぎって言った。

「沙織のおかげで女好き治ったし、茶髪もなかなか似合うこともわかったんだから」

ニッと笑う修平の顔は幸せそうだった。

「じゃあもう戻るわ。呼び出してごめん」

謝られるようなこと、何もされてない。

私は首を横に振る。軽く私の頭を叩いて宮原先輩は屋上から去っていった。

「何も知らなかった……っ」

私はしゃがんで、両掌で顔を覆う。

みんな相手の気持ちがあわかってても、ちゃんと思いを伝えている。

「決めた」

空を見上げた私の表情は決心を固めた真剣なものだった。

22

「そろそろ、かな」

佳苗は一人で図書室にいた。テスト期間が終わった今、図書室には人が少ない。

脳裏には片思い中の男と大切な友人の顔が浮かんた。

「ふう……」

読んでいる本は『森ノ宮の七不思議』。真っ黒な表紙に赤い文字で書かれたそれは今まで借りた人間の少なさを物語るだろう。

本に集中していた佳苗のところに、前にある椅子の動く音が耳に入った。

「変わってる本読んでるね」

忘れられないその声の主は椅子に座って机に肘をつける。

「誰も読まなさそうな本からも情報は得られますから」

小さな活字を目で追う佳苗はやんわり微笑む。

「どうでした？ 修平先輩」

脱力したのか体を机に預けてため息を吐き出す。
うなだれた長い腕は佳苗に届きそうだった。

「フラれた」

「……お疲れ様です」

その後の二人は静かだった。佳苗がページを捲る音がするくらいだ。

「予想してたけど、やっぱり辛いもんだね」

「あたしはこの前それを充分味わいましたけど？」

佳苗と修平はそれぞれ片思いにピリオドをうった。

「佳苗さん」

「はい？」

読み終えたその本をパタンと閉じて修平を見つめる。

「オトモダチから始めませんか」

少し頬を赤くした修平の姿に佳苗は笑みをこぼす。

「……先輩、そのセリフちょっと古いですよー？」

「うるさいよ」

そう言った修平の顔はからかわれたせいで更に真っ赤だった。佳苗はすっと立ち上がる。

「これからよろしく願いしますね、修平先輩」

「うん」

「じゃあまずは遊園地でデートなんかいかがでしょうかっ！」
「……友達からって俺言わなかった？」

修平の問いに佳苗が得意気に笑う。

「勿論、お友達としてですよ？」

「佳苗さんって結構強引だね」

「好きな体育祭の種目は綱引きですから！」

「……それ威張るところ？」

楽しそうに修平は笑った。

「まあまあ。でもその前にやるべきことが一個！」
「？」

話を通じてない修平に佳苗は不敵な笑みを浮かべる。

「目指セラブラブ作戦！」

「……何それ？」

ネーミングセンスを疑いつつも、修平が尋ねる。

「沙織と羽山先輩をくっつけようと思ひまして」

「それってフラれたばかりの俺に物凄いダメージだね」

喝いた笑いしか出ない修平。

「あれですよ、悲しみを乗り越える試練みたいな」
「あっそう……」

どこまでも我が道をゆく佳苗についていけるか、少し悩む修平だった。

23

「こんにちは葵君」

「帰れ」

閉めようとしたドアの隙間に足を入れて止められた。
古典的なパターンだな、おい。

「何だよ。説教ならもう生徒指導から聞いた」

寝癖のついたボサボサの髪をかいて、欠伸をこぼす。低血圧で寝起
きは最悪だから、今の顔は見れたもんじゃねえ。

呼び鈴で起こされたことがどっからどう見てもわかるだろう。

呼び鈴を押した張本人である酒井の奴はただ微笑んできた。

「今日は早帰りの日で暇だったのでちょっと家庭訪問に来ました」
「家庭訪問？」

あまりにも自分勝手な言葉に俺はただただ呆れるばかり。

「随分……何もない部屋ですね」
「やっぱお前帰れ」

結局、酒井は人の部屋に押し入り勝手に探索している。
俺は仕方なしにキッチンに立ってインスタントでコーヒーを作って

いた。

「冗談ですよ」

酒井の言葉はあながち冗談でもない。俺の部屋はベッドとテーブルとテレビなど、生活に必要な最低限のものしかないからだ。

「んで、本当は何の用なんだよ？」

コーヒーを酒井の前に置いて俺は床に座った。

「正直、葵君が自宅にいるのは意外でした」
「は？」

カップに口をつけたのをわざわざ離して酒井を見やる。

「知らないでしょうけど僕は今まで何度か葵君の家に来てたんです。あなたが停学処分の人に」

酒井はただ笑ってて、悔しいけど大人の余裕を感じた。

「いつ行っても葵君はいなくて、寮長に話を聞いたら帰ってこないって言うじゃありませんか。それなのに今日はおとなしく謹慎している。これはなぜか」

「さあな」

含み笑いを浮かべ、酒井は俺の瞳に照準を合わせた。

「元パシリの沙織さんが関係してるんじゃないですか？」
「……あんな女知るか」

元パシリって言葉に苛ついた。そんな俺を見て酒井は一息吐く。

「沙織さんは両親が離婚しています。父親が母親に暴力をふるっていたらしいですよ」

「は……？」

沙織の父親が暴力？

聞いたこともない話に俺の思考は珍しく固まる。

「彼女の目の前で暴力は日常茶飯事で行われていたそうで、おそらくそれがトラウマになってるんでしょうね」

「おい、それ……」

「僕は今独り言を言ってるんです」

質問を寄せ付けない態度。最後まで話を聞けって意味だ。

「暴力はあまり見ていて良いものではありません。沙織さんは、あなたを心配してるんですよ。事実、停学になったでしょう？」

何も返す言葉がなかった。

いつも笑ったり怒ったりする沙織にそういう話があるのを知らなかったことがショックだった。

「葵君もだいぶ丸くなってくれて良かった」

そう微笑んだ酒井の顔はどこか嬉しそうでまた腹が立った。結論から言えば、どっちにしても俺は目の前の男が嫌いだ。

「それじゃ、そろそろ失礼します。もう一人、家庭訪問に行かなき

やいけないものですから」

そう言い残して酒井が去ろうと立ち上がる。俺は煙草に火をつけてぼんやりと空を仰いだ。

「あ、そうそう」

嘘っぽい思い出し方だな。でもコイツにはそれが似合ってる。

「これからプロポーズしに行くんですよ」

「は？」

「勿論菜々さんにですけどね」

「そんなんわかってる。ただ……随分急じゃねえの？」

最近の菜々の様子から見ても二人が上手くいってないのはわかった。

「待ちきれなかったんですよ……三年越しの恋でしたから」

吸っても良いですか、と珍しく酒井は煙草を取り出した。常備されてる灰皿を差し出すとありがたいと言わんばかりに目を細める。

「何でそのときに言わなかったんだ？」

「言えるわけじゃないでしょう？ あのとときの僕は、葵君に嫉妬するほど子供だったんですから」

意外な発言に俺は少し目を丸くした。

酒井の表情はいつも通りで……ある意味恐い。

「意外ですか？」

「……ああ」

「出来るだけ周りにわからないようにしましたから。でも、それが原因で葵君と衝突しましたね」

誰かのために人を殴ったのは初めてのことだった。

「菜々さんも引越してしまい、しばらくは後悔が僕の毎日でした。そして後悔は恨みへ、それは葵君へ……」

「それが沙織監禁事件か」

「ええ。この前丁重に謝らせていただきました」

「ふーん」

興味なさそうに相槌を打った。

「一つ聞いても良いですか？」

「何だよ」

「菜々さんのことを、まだ愛してますか」

そう聞いてきた酒井の顔は真剣そのもので、俺は自分にいれたコーヒーを飲み干してから言った。

「人としてはな」

「恋愛感情は……」

「無えよ。ただ、好きだったのは確かだ」

確かに好きだった。綺麗な笑顔も真直ぐ人を見てるところも。

「酒井」

「はい」

「幸せにしるよ？ 今度こそ絶対に離すな」

まるで自分に言い聞かせてる気分だった。

「はい」

酒井は笑顔でそう返して帰っていった。

「煙いな……」

流石に二人分の煙草は煙たい。

窓を開ければ、俺の感情に反して五月晴れの空が広がっていた。

***24* (前書き)**

あとがきにお知らせがあります。

24

「沙織ちゃん」

「あ、菜々先生こんにちは」

帰り道を歩いていた私は菜々先生に呼び止められた。

「元気そうね、パシリ辞めたって聞いたけど」

その表情は喜びに満ちていた。私に勝ったって思ってるみたいで。

「お陰さまで。決心が着きました」

「……決心？」

「私、羽山先輩に告白します」

「は……？」

驚いてるか呆れてるかはわかんないけど、菜々先生はあんぐりと口を開けていた。

「叶わなくても、伝えたい気持ちがあることがわかりましたから」

私はもう吹っ切れた。迷いはない。

「あの子に、何か言われたの？」

「あの子？」

「いつも一緒にいる友達」

ああ、佳苗さんのことか。明るい笑顔が頭をよぎる。

「言われてません。身をもって教えてくれました。……失礼します」

軽く頭を下げてて私はその場を離れようとした。

「待って！」

菜々先生が大声を出した。

「？」

「あなたにとって、友達って何？」

「……人生の先生であり、生徒でもあるかけがえのない存在、ですかね」

そう答えて私は再び歩き出した。

残されて杳然としている菜々先生に近づく一人の男。それに私が気付くことはなかった。

「友達から、か……なんか純愛っぽいね」

「うん、あたしも古いって言っちゃったよー」

昼休みの中庭に私と佳苗さんはいた。

佳苗さんの動きだした恋の知らせを聞いて自分のことのように嬉しく思う。

でもそんな良い気分はすぐに壊された。

「和泉沙織ってあんた？」

声の元を見れば、化粧のやや濃い上級生が数名。声からしても良い呼び出しではないのはすぐにわかった。

「……そうですが」

「葵君のパシリ辞めたんだって？」

「まあ」

あんまり人の傷口えぐらないでほしいなあ……。

「ずいぶん遅かったじゃん。待ちくたびれたし」

「ホントホント」

きゃいきゃいしゃべっている上級生をぼんやり眺めて必死に聞き流す。

「ま、世間話はここまでにするわ」

「ここからは忠告ね」

上級生の表情が急に変わった。

上手く言えば女優に近いくらい。

「また葵君に近づこうとか思っちゃ駄目よ？」

「多少頭良くて、所詮あんたは凡人なんだから。葵君につりあってないんだよ」

何度か私にきつく言いながら、上級生達は去っていった。

「沙織……大丈夫？」

心配そうに私を見つめる佳苗さん。ホントに良い友達を持ったなあ、私。

「大丈夫だよ」

私は微笑む。

少なくとも、あの上級生達より羽山先輩を好きな気持ちは負けてない。

「……強くなった？」

「ん？」

「なんか沙織、前より物事に動じなくなった気がする」

「そう、かもね。先輩のパシリやってからかな」

監禁とか縛られたりとか。……私の平凡な生活はもうないかもね。

「愛の力ってやつー？」

「ばーか」

「酷っ！」

なんてじゃれあっていると。

「貴方達、本当に仲良いわね」

にっこりと笑みを浮かべた菜々先生が現われた。

「こんにちはー」

「こんにちは」

「あ！ 先生の薬指っ……！」

佳苗さんは声をあげた。私も視線を移すと菜々先生の薬指にはダイヤが輝く指輪。

「ふふっ、酒井先生と結婚するの」

「……はっ？」

何、この逆転ホームランっぽい展開！

いまいち付いていけない私を置いて菜々先生は話し始める。

「沙織ちゃんと別れた後、酒井先生に会ったの」

私と別れた後っていうのはたぶん昨日帰り道でのときで。

「それで……まあ自分の醜さをちゃんと受け止められて、酒井先生……友喜さんにプロポーズされたわけよ」

自分でも何て説明すれば良いかわからない。菜々先生はそんな風に見えた。

「自分の醜さって？」

佳苗さんが尋ねる。私と佳苗さんの間に座った菜々先生が苦笑いをしながら答えた。

「知ってるだろうけど、あたしは友喜さんと葵君二人を好きだったのよ。でも本当は友喜さんしか見てなくて、葵君は嘘の気持ちだった」

中庭にある木々がさわさわと揺れる。そこはまばらに人がいるのに、私達の周りだけ静寂に包まれていた。

「氣を引きたくて、あたしを見て欲しくて、思いつきり妬いて欲しかった。でも一人で頑張るのに疲れたみたい。沙織ちゃんには酷いことばかり言っちゃうし、なかなか友喜さんは動かないし……」

先生は立ち上がって私に向き直る。

「ごめんなさい。酷いことばかりしたわね」

「……いいんです。先生が色々言ってなかったら、私の羽山先輩の気持ちにも気付かなかったでしょうし」

「沙織めっっちゃ鈍感だもんねー」

「うるさいよ」

またじゃれる私達を見て、菜々先生がゆっくり口を開く。

「昔……っていつでも高校生のときなんだけど、あたしにも親友がいたの」

「？」

突然の昔話に私と佳苗さんは顔を見合わせる。

「凄い仲良しで、姉妹みたいって言われるくらいだったわ。ずっと仲良くしていられると思ったのに……ある日好きな人がかぶっちゃったの」

自分の過去を話すことは滅多にないんだろうな。菜々先生が微かに震えてるのがわかった。

「お互い譲らなくてさ、結局絶交状態のまま卒業。……だからあんまり女同士の友情とか信じてなかったんだけど、信頼してる貴方達を見てたら自分が間違ってる気がしてきちゃった」

菜々先生は私達を見て微笑んだ。
もう震えはない。

「それを友喜さんに言ったら、今の君をずっと待ってたって言われたの」

「今の君？」

「ずっと待ってた……？」

私達には端的すぎていまいち理解しづらい。

「葵君と友喜さんが喧嘩したとき、あたしの精神状態は最悪だった。全部壊れちゃえばいいって思ってたの。それを彼は気付いてたみたい」

「過去を受け入れた菜々先生を待ってたってことですか」

私の言葉に菜々先生は唇を撫でる。

「そうね、たぶん」

「ひゃー、ロマンチック！」

佳苗さんの目がキラキラ輝く。

ホント、夢見る乙女さんだよね。私はどっちかっていうと現実主義だから、先生の話もぽかんと聞くしかなかった。

「二人のおかげよ、ありがとう」

そう言って微笑んだ菜々先生はホントに幸せそうで。先生を好きな羽山先輩のことを思うと胸が痛んだ。

「あの、羽山先輩には……？」

「友喜さんが伝えてるわ。本当は、あたしが行って謝るべきなんだけど……彼が話したいことがあったからいいって言われてね」

「そう、ですか」

先輩は今頃知るのかな。

「で、葵君にもう告白した？」

顔を近付ける菜々先生に、私は首を横に振った。

「告白？」

佳苗さんはきょんとしている。

「あら、沙織ちゃん言ってなかったの？ 葵君に告白するって」

「……えええ、何それ！ あたし聞いてないよ！」

私に詰め寄られた。

そういえば言ってなかったね……。

「いや、昨日決めたことだったし……タイミングが、ね？」

「もお！ 親友にはまず報告でしょ？」

「ごめんごめん。でもしばらくは近付けない、かな」

「……何で？」

そりゃあ勿論。

「上級生の目が光ってるもん。しばらく告白は無し」
「ふーん……」

それを聞いて佳苗さんは少し考えるそぶりを見せて気付かれないように一人ニヤリと笑みを浮かべた。

私はそれにまったく気付かなかったけど。

***24* (後書き)**

いつも読んでくださりありがとうございます。

お知らせなんです、しばらく実生活の方が忙しくなってしまうので、次回の話が二月頃になってしまいます。

勝手な理由で申し訳ありません。

これからもこの作品をよろしくお願いいたします。

***25* (前書き)**

長い間止めてしまい、申し訳ありませんでした。更新再開します。

25

「沙織が告白？」

「そうなんですよ。やっとその気になったのに上級生の女達が文句つけてきて……」

ファミレスで大好きなパフェを口に頬張って佳苗は修平に愚痴をこぼしていた。

「ふーん」

修平はブラックコーヒーを飲みながら相槌をうつ。

元々甘いものが好きでない彼からすれば、佳苗の食べっぷりはなかなか見応えがある。

「先輩、羽山先輩にさりげなく聞いてみてくださいよ」

「何を？」

「決まってるじゃないですかー、沙織への気持ちですよ！」

生クリームのついたスプーンを振り回して佳苗は言う。

「……沙織に失恋した俺にそんなこと聞かせる気ですかー」

「真似しないでくださいよお」

「ごめんごめん」

二人の空気は和やかなものだった。

「そういえば俺、最近先輩と話してないや」

「そうなんですか？」

「……あれ？」

「？」

「俺、沙織にフラれたこと先輩に言っただけ？」

「……さあ？」

その後、修平はしばらく考え込んでしまった。

パフェを食べ終えた佳苗には退屈以外の何ものでもなくて。

「あ、すいませーん！」

ファミレスのメニュー制覇に熱を入れることにした。

「もしもし」

場所は変わって葵の部屋。修平からの電話に出る。

「お久しぶりですー！」

「……は？」

それは明らかに修平ではない女の声。

相手のテンションの高さに早くも葵は顔をしかめた。

「あ、あたしのこと覚えてませんか？ ショックー」

おかしいな電話越しの声には聞き覚えがある。

「……上原さん、頼みがある」

「おーっ！ やっぱ覚えててくれたんですか！」

「修平に替われ」

耳元でギャーギャーうるさいので葵は完全に脱力してしまった。

「はい。修平先輩どうぞー」

「え、俺？」

カタツと携帯の移動する音が聞こえて安堵のため息を漏らす。

「もしもし……」

「お前何やってんの？」

知らず知らずのうちに葵の声にトゲがつく。

「いや……さっきまでファミレスいたんですけど、いつのまにかコイツ酒飲んでて」

それに恐怖を感じたのかいつにも増して修平は饒舌だ。

しかし制服着てんのに酒出す馬鹿な店がどこにあるのだろう。

「……今どこ」

「え、宮森公園ですけど」

すぐに頭に地図を浮かべる。

「用があんだろ？ 今から行くから待ってろ」

「いや、そんな迷惑……」

「良いよな？」

「勿論です！」

寒くない程度に上着を羽織り、葵は公園に向かった。

「あー、目え回ってきた！」

「……酒飲んだからね」

公園のベンチに横たわる佳苗に対して冷静に言う修平。

「先輩、羽山先輩に聞きましたー？」

「今から来るんだって。さっき言っただろ？」

「んー？ 覚えてない」

「……はあ」

酔っ払いの相手は慣れてない修平。

ひとまずファミレスから出て人の迷惑にならないように来たのが公園だった。

「おら、その酔っ払い学生ども」

「あ、羽山先輩ー」

ヘラヘラしている佳苗を見て、葵は片手で顔を覆った。

「修平」

「はい……?」

「俺は酔っ払いを相手にするほど暇じゃねえ。用件は何だ」
「えーっと……」

煮えきらない返事の修平に葵の苛立ちは募るばかり。
勝手に来たのに矛盾している。

「あと三秒で言え。一、二……」

「俺この前沙織にフラれました」

「……は?」

予想外の言葉に葵は目を丸くする。

「ホントですよ。アイツ他に好きな人がいますから」

黙り込む葵に修平は言った。

「先輩、もう気付いてるんじゃないですかー?」

今まで黙っていた佳苗が言う。
目をふせ黙り込む葵。

「沙織は羽山先輩のこと、真剣に考えてます。だから……」
ベンチから離れ、葵に歩み寄る佳苗。

「お前も本気見せろよな」

両肩をつかみ、低めの声で佳苗は言い放った。

「あー、スッキリしたっ！ それじゃあたし失礼しまーす」

軽やかな足取りで佳苗は去っていった。

重い空気が流れる二人の男。先に沈黙を破ったのは葵だった。

「お前あいつと付き合ってたの？」

さっきまで佳苗が寝転んでいたベンチに座って足を組む。スーツ姿だったらホストみたいだ、と修平は思っていた。

「違いますよ……まだ」

ムスツとした顔で修平が言う。

「まだ？」

「一応告白されたんですよ。まあ……そのうち付き合うかもしれないです」

「そんな早く心変わりしたのかよ」

葵は冷たい視線を浴びせる。

「んー……なんだろう、失恋した後、いつもそばにいてくれたのが佳苗だったから……かな。」

その隣に座って呟いた。

「もしかして先輩……まだ菜々先生のこと引きずってんですか？」
「違えよ。ただ……」

神妙な顔で言葉をうやむやに吐き出す葵。

「ただ？」

「沙織の気持ちに、俺答えられんのかなって」

意外な言葉に修平は目を見開いた。

いつも強い存在だった男が一人のパシリに動揺させられている、その驚きは大きい。

「あんなに俺のこと助けた人間に、どう接して良いかももうわかんねえんだよ」

困り果てた葵の姿は初めてで。

自分と同じ人間なんだと修平は思った。

「……いつも通りで良いんじゃないですか？」

「あ？」

「だってそんな先輩を沙織は見てきたんだから。まあ、佳苗さんや俺もだけど」

目からウロコとはこのことだろうか。曇りが晴れて眩しいくらいだ。

「……お前生意気。先輩に意見すんなよ」

「や、あの」

不機嫌そうな表情の葵に修平は冷や汗を流す。

「ばーか、冗談だよ」

「よ、良かった」

「……ありがとな。」

「え……」

「聞き返すなアホっ！」

「イデっ！」

照れ隠しのためか、葵は修平を殴った。……かなり本気だったらしく、しばらく修平は蹲って動けなかったらしい。

***25* (後書き)**

読んでくださって嬉しく思います。

忙しかった生活も一段落して、更新再開出来そうです。

読み返すと、だんだんあらぬ方向へ向かっていますが、頑張ってますので、これからもよろしくお願いします。

26

「やつほー！ 遊びに来たなりい」

勝手に私の部屋に上がる佳苗さん。でもそんなの慣れっこ。ため息をついて佳苗さんの後ろを歩く。ここで、私はようやく気付いたんだ。

「お酒飲んだ？」

「うん、もう最高に気分良いー」

何も言えなくなったものの、私はコップに水を汲んだ。

「一人酒なんて寂しいと思うけど」

「二人じゃないもん。修平先輩もいたし！」

元々騒がしい佳苗さん。ムツとした表情も可愛らしい。

「……先輩は飲んだの？」

「んー？ 飲んでないよ」

「そっか」

大変だったろうなあ、佳苗さんの世話。

ぼんやりそんなことを考えていると、携帯が鳴った。

「もしもし？」

「あ、沙織ちゃん？　うちよ、わかる？」

関西弁が聞こえてきて、私はすぐに相手が誰だかわかった。

「おばさん？」

それは私の伯母であり育ての親でもある和泉幸子イズミサチコさん。

「大正解ー！　賞金1000円や！」

伯母さん、たった1000円なんですか。
突っ込みはあえて言わないでおく。

「どうしたの？　いつもは手紙なのに」

「ふふーん。実はな、今東京におんねん！」

「……はい？」

こればかりは聞き流すわけにはいかない。

「あ、勿論うちの馬鹿は留守番！　二人ともおらんで店閉めたら儲からんしねっ！」

伯母さんは旦那さんである徹伯父トオルさんと二人で好み焼き屋を営んでいる。

ちなみに馬鹿っていうのは伯父さんのこと。

「いや、そういうことじゃなくて……」

「心配せんでも今日いきなり沙織ちゃん家行ったりせんって！」

「そ、そうだよね」

ただの観光か。

ホッとため息をつくものの、次の言葉でそれは一気に消え去った。

「明日の昼頃、そっちに行く予定やから」

「え」

「あ、これからホテルでチェックインせななんのよ、そっち行く前にまた明日電話するわ」

「えっ、ちよっとおばさ……」

勝手に言われて勝手に切られた。

「どうしたの？」

不思議そうな顔で私を見る佳苗さん。

「明日おばさんが来るって」

「へえー、急に押しかけるなんてずいぶんマイペースな人だね」

佳苗さんも負けてないと思うよ。

なんだかねで、明日のことをかなり不安に思う私だった。

「いない……」

私は駅の改札口にいた。勿論伯母さんの出迎えだ。

「駅にいてってメールしたのに」

携帯を眺めて不安そうにホームの方を見つめる。
言われてた時間になっても伯母さんは現れなくて。

「もう少し待ってみよ」

近くにある椅子に座り、私は待ち続けた。

「……おかしい。電話も繋がらないなんて」

待つこと数十分。一向に現れない伯母さんに私は不安になる。
携帯とにらめっこしていたそのとき、電話がかかってきた。

「……羽山先輩から？」

緊張気味に通話ボタンを押した。

「もしもし……?」

「今どこ？」

「は？」

唐突すぎて聞き返すでしょう、普通。

「だから今どこにいるんだっての」

「え、駅にいますけど」

「駅……って思いきりすれちがいじゃねえか！」

あれ……私、もしかして怒られてる？

「そんなん知らんわ！ それに沙織ちゃんにそないな言葉使わんでよ！」

見知った声にふと首を傾げる。

「先輩、今誰といいます？」

「自称お前の伯母」

「自称ちゃう！」

「……何がどうしてそうなってるんですか」

流れの意味がわかんないよ。私は盛大に溜め息を吐く。

「伯母さんの希望通り女子寮の前まで連れてきたけど、お前出かけたって聞いてよ」

わざわざすみません、と羽山先輩に謝罪を入れて。

「すぐ行きますから！」

伯母さんが帰るまで無事に過ごせることはなさそう。

私は急いで寮に向かった。

「はっ、はぁっ……」

息を切らして私は女子寮の前に。

「お疲れ」

羽山先輩は平然とそれを受け入れる。

まるでパシリのときみたいだ、なんて甘い考えがよぎった。

「す、すみませ……うちの」

「沙織ちゃん！」

大声で私の話をさえぎり、勢いよくに抱きつく伯母さん。

「ちょ、伯母さん離れて……っ！」

「何でー？　せっかく久々に会えたのにい」

だって苦しいんですもの。下手したら窒息死だよ！

「じゃ、俺帰るわ」

「ちよい待ち！」

何故かわかんないけど伯母さんが羽山先輩を呼び止める。

「？」

先輩は勿論、私も首を傾げる。

でも伯母さんのことだから、また突拍子もないことなのはなんとなくわかった。

「二人は付き合ってるの？」

「……は？」

ちょっと何言っちゃっててんの伯母さん！

「だって年違うのに知り合いやし……」

「色々あるんだよ、な？」

「あははは……」

思わせ振りの発言をする羽山先輩に渴いた笑いしか出ない私。
伯母さんは少し不思議そうな顔でそれを見ていた。

「いややー、あーいうかつこいい子見ると何で自分があんな馬鹿と結婚したんかわからんようになるわ」

「愚痴は良いから。で、何で来たの？」

羽山先輩と別れて、私と伯母さんは私の部屋にいた。

「……来たらあかんかった？」

「ううん。ただ気になっただけ」

紅茶入りのカップを伯母さんに差し出す。

何度か息を吹きかけて冷ましてから伯母さんはそれを口に運んだ。

「高校入ってすぐに手紙くれたやん？」

「あー……うん」

「読んでたら会いたくなって。あ、でもちゃんと我慢はしたんよ？
せやけど長続きせんで……」

「わかったから。心配してくれてありがとう」

「当たり前やろ、家族なんやから」

「……うん」

伯母さんとのんびりと話に花を咲かせかけた。でも私の中の一つの疑問はデカイ。

「何で羽山先輩といたの？」

「ん？ 道聞いたらたまたま」

……偶然って怖い。

「あの子煙草吸つとるから二十歳に見えたわ」

「あー……」

「勿論取り上げたで？」

「流石伯母さん……」

関西人だからってわけじゃないけど、私の伯母さんは積極的であり強引。

お店も伯母さんの性格からか人が集まるらしい。

「あとうちが三十若かったらなあ」

「ははは……」

結局伯母さんは寮で一夜を過ごした。

「今何て言った？」

「だから、葵君に会いたいんやって」

「……何故に？」

わけがわからないですよ、ホントに。

「うちの馬鹿に土産買わなあかんよ。男物なら男に聞いた方がええやろ？」

「そりゃまあ……」

なんだかんだ彼氏いない歴は自分の年齢なんだね。
男のことは全っ然わかんないさ。

「一生のお願い！」

「い、一生のお願いって……」

子供か、って突っ込みたかった。

嫌だったけど、伯母さんの勢いに負けて私は羽山先輩に電話する
ことに。

「はあー……」

出なきゃ良いな。せっかくの休みに付き合ってもらうとか、無駄に
期待しちゃうよ。

「もしもし？」

「あ……もしもし、沙織です」

びっくりし過ぎて反応遅れたよ。
だってワンコールで出てくれるなんて思わないじゃんか。

「いちいち名前言わなくても声聞けばわかっから」
「あ……そうですね」

寝起きっぽいよー！
めっちゃ不機嫌だよ先輩。

「で、何？」

「あの、実は」

「もしもし？ 昨日はどーも」

私から電話を奪い取り、伯母さんが大声で話す。

「ごめん寝とった？」

電話とられたから当たり前だけど先輩の声が聞こえない。

「これから買い物行くんやけど、付き合ってくれへん？」

単刀直入なお誘いだなあ。わかりやすくて良いけど。

「ええやん、うちの仲やろ？」

いや、どんな仲だよ！ 昨日会ったばかりじゃん。

伯母さんはいつの間にかニヤリと笑ってピースをしていた。

「何買いてえの？」

待ち合わせはデパート前。

どう言いくるめたかはわかんないけど、伯母さんの言った通り羽山先輩はそこに現われた。

「んー……タオル」

「タオル？」

「だってうちお好み焼き屋やからネクタイとかいらんもん」
「ふーん」

仲良さげな先輩と伯母さん。

……私もしかして必要ない？
来て早速、帰りたくなった。

「沙織ちゃん、これどう？」

幸子が持っていたのは水色地にたこ焼き柄の派手なタオル。

「や、伯母さん家お好み焼き屋でしょ？」

「結構ユーモアあるやろ？」

「だからこっちのが良いっつーの」

葵は紺色のシンプルなタオルを持っている。

「私も紺色が良いと思う」

だってお店で使うわけだしさ。伯父さんならきつと似合うだろうけ

ど。

「そうかなあ……」

結局伯母さんは両方とも買うことにした。

「ありがとお、沙織ちゃん」

「うん」

伯母さんは帰りの新幹線の前に立つ。

私は勿論見送り。

「葵君もせっかくの休み邪魔してホンマに悪かったわあ」

「別に。いい暇つぶしになった」

何故か私の隣には羽山先輩もいて。

心臓がばくばくして大変。

「そんならええけど……あ、沙織ちゃん」

意味ありげな視線を伯母さんが送る。

私は訳が分からないままそこに近寄った。

「――」

「な……っ、何言ってるの！」

伯母さんの耳打ちを聞いた途端、私は怒鳴った。
頬が一瞬で赤くなる。

「こうでもせんと、何も起こらんよ？」

「そう、だけど」

羽山先輩はただ傍観を続けるのみ。

私がしゃべる前に、発車のベルが鳴った。

「ほな、また今度遊びに来るから」

「うん」

「葵君」

「？」

「沙織のこと、お願いね？」

「……はあ」

「伯母さん！」

先輩が曖昧に返して私がまた怒鳴ったところで新幹線のドアがしまった。

楽しそうに手を振り、伯母さんは大阪に帰った。

27

伯母さんが帰ってから数日が過ぎた。

「また羽山先輩パシリ変えたらしいよ」

「え……これで五人目だよ？」

「二週間に五人って最速記録じゃない？」

「次は誰がなるんだろ」

好き勝手に騒ぐクラスメイト達の会話が耳に入る。

確かにパシリの入れ替えは激しくて、佳苗さんの情報でも前代未聞だそう。

「あたし立候補しよっかな」

「馬鹿、アンタなんか眼中にないって」

「うわ酷っ！」

盛り上がってますよね、こっちが悲しくなるくらいに。

学校ほとんどの女子生徒は次のパシリが気になるみたいで、新聞部でも調査してるらしい。

「ねえ、沙織ー。まだ先輩に告らないの？」

佳苗さんは眉間にシワを寄せて聞く。

「うん」

「だってパシリ変えまくりだよ？ あんな浮かれた会話だって聞きたくないもん」

横目で女の子達を眺める姿は不良っぽい。

「だって、代わりはいくらでもいるんだから」

目を閉じて私は言った。そう自分に言い聞かせるしかないから。

「百歩譲って告らないでも良いとしよう。でも何かしら進展させなきゃ駄目じゃん？」

「……そうだね」

何か、頭が働かない。先輩のこと考えすぎておかしくなったかな。

「大丈夫？」

「え……？」

不意に佳苗さんが私のおでこに触れた。

あー、ひんやりしてて気持ちい……。

「沙織帰ろう」

「はい？」

両肩つかまれた私は首を傾げた。

真面目な顔した佳苗さん久々に見たよ。

「無茶苦茶熱あるじゃんか！」

「そっかな？ あ、次移動だよ。行こ？」

「あ、うん……って馬鹿あ！」

突っ込まれて前後に揺さぶられて目が回る。

私はドクターストップならぬ佳苗さんストップを言われておとなしく保健室に向かった。

「37度8分。完璧に風邪だね」

「……だるい」

私は保健室のベッドに横になっていた。

熱があるのが数字でわかると、今更になって頭痛やだるさがやってきた。

「沙織大丈夫？」

「うん、とりあえずは……」

眉をへの字に曲げて心配してくれる佳苗さん。

「じゃあ上原、授業戻んな」

「先生！ あたしと沙織を離れ離れにする気なの？」

役者っぽい演技。

熱のこもりっぷりに流石だと思ってしまった。

「馬鹿言っていないで行け。授業出なきゃ単位やばいだろ？」

「うっ……」

最後の一言が大打撃だったようで、佳苗さんは何度も謝りながら次の授業へ向かった。

「それで和泉い、私今から出かける用事があって保健室にいられないんだけど平気？」

冷めた顔で保健室の先生がベッドを囲うカーテンに顔を覗かせる。短く揃えた髪はこげ茶色。男勝りな性格から、学校一男前な女教師と呼ばれてる。

「大丈夫です。落ち着いたら、早退しますから」

「そう、んじゃカード書いておくから」

「はい」

そう言うとき先生はカーテンを閉める。

一人になった私はすることもなく、自然と近付いてきた眠りに落ちていくしかなかった。

***27* (後書き)**

読んでくださるその貴方、いつもありがとうございます。

方向性がわからずにどんどん話の数が増えようとしています、
完結させる気があるので気長にお待ちください。

「修平ー」

「何すか、葵先輩」

「ヒマなんだけど」

「なら授業出たらどうっすかね？」

サボる俺に付き合ってるのか、修平は“森ノ宮のすべて”なんて怪しい本読んでやがった。酔っ払いの影響か。

「パシリでも呼ぶかなー」

「授業中なの？」

「俺の頼みなら誰でも来る」

自分でもおかしなことを言ってると思った。アドレスからパシリの女を探して携帯にメールを打ち込む。

「……沙織なら断りますよ」

ボタンを押していた手が止まった。

「俺が呼ぶのは今のパシリなんだけど」

「先輩最近沙織と話しました？」

不思議そうな修平。年下に心配かけてばっかだな俺。

「黙ってるなら肯定になりますよ」

「この前の土日に出会った」

「え、デートっすか？」

「三人でな」

俺と沙織と沙織の叔母さんで。

今思えばほとんどあの伯母さんが中間に立ってたな。

「……はい？」

修平が尋ね返したとき、修平の携帯が鳴った。

「もしもし佳苗さん？」

なんだ酔っ払いかよ。

つつーか今授業中じゃねえの？ アイツもサボり……なわけねえか。

沙織が許さねえし、留年まっしぐらだ。

日差しの心地よさから、寝転がって修平の電話に耳を傾ける。

「今？ 屋上だけど……」

修平は戸惑い一つも答えている。

「え、ホント？ ……わかった言っとく」

言っとくってのはもしかして俺にか？

「酔っぱらい何だって？」

「……沙織が熱出たそうっすよ」

「熱？」

吸い始めた煙草の煙が空に浮かぶ。

あの沙織のことだからまた変なところに氣いまわして疲れたんだろうな。

「お見舞い、行きませんか？ 今保健室に……」

「いい」

速攻で断る。会っても何もやることねえし。

「……んじゃあ俺行ってきますよ」

「は？ お前行くの？」

有り得ねえだろ、と思えば。

「心配っすから」

そういやコイツは一時期沙織が好きだったんだっけな。

……不安になってきたじゃねえか。

「ちょっと待った」

上手く誘導された気がしたものの、結局俺も行くことにした。

「修平の野郎……急に用事が出来たとか言いやがって」

つまり俺は一人で保健室まで来たわけだ。
中は先公も留守らしく、ベッドの周りのカーテンは一つしか閉まってない。

「はあ……」

音をたてないようにカーテンを開けて眠っている沙織を見た。
熱のせいかいつもより顔色が悪い。

「ホントに熱あるんだな……」

俺は一人口を開いた。

手は勝手に沙織の黒髪に触れていて、妙に懐かしい気分になった。

「あの……先輩？」

ハッと意識を戻せば沙織が目を開けてこちらを見てる。

「起きたか？」

「あ、はい……」

髪に触ったことが気まずくて、俺はそっぽを向く。

「……先輩」

「あ？」

「えーっと、その……」

目を泳がせて言葉を探す沙織。
言いたいことがあるらしい。

「はつきり言え」

「……この前は、ありがとうございました。伯母さんも喜んでたし、私も楽しかったです」

沙織の顔は熱のせいかな恥ずかしいのか真っ赤になっている。
目なんかも少し潤んでて、一瞬くらっとした。

「……おー」

くしゃくしゃと沙織の頭を撫でる。
沙織はボフツとベッドに倒れこんだ。

「大丈夫か？」

「だっ、大丈夫です。だから教室に戻ってください……」

やばいだろうってくらい沙織の顔は赤かった。

「馬鹿か、病人置いていけ」

「失礼しまーす……あ、羽山先輩」

うっわ……酔っぱらいの登場。
心底嫌な顔になる。

「あの、佳苗さんが来たから平気です。だから戻ってください……
葵先輩」

「……わかった」

俺はドアまで進んでから沙織の方に振り返った。

「さっさと帰って早く治せ」

そんな冷たい言い方しか出来ない自分がほんと嫌になる。

「あんな赤い顔すんなよなー……」

保健室を出てから頭をがしがしく。

気になる女だと、俺はちよつとしたことにも動揺するらしい。

「情けねえな」

「先輩ー」

修平が軽やかな足取りでこちらに向かってきた。

「沙織に会いました？」

それを見た瞬間、俺は沸々と怒りがわいてきた。

「お前今までどこ行ってた？ ああ？」

「イデデデ……っ！」

笑顔で修平の頬をつねり上げる。

「せ、生徒会に呼ばれてたんすよ！」

「……生徒会？」

修平の頬から手を離して聞き返した。

「来月ここで夏祭りがあるから宣伝してくれて頼まれたんすよ！」

俺かなり強くやったな。つねられた頬は真っ赤で修平の目には涙が溜っている。

「うちの学校で夏祭りなんか今までやったことねえだろ」

「そんなの知りませんよ……でも屋台とかあるし、本格的らしいっす」

「ふーん」

絶対参加したくねえ話だな。

「しかも御三家は強制参加。必ず浴衣着用で」

「…は？」

さらりと発言した言葉に頭は固まる。

「ちょっと待て。そんなの聞いてねえぞ」

「だから今言ってるじゃないっすか」

「つか何で強制なんだよ？」

御三家なんか好きでやってるわけじゃねえんだぞ。

「うちの学校、他の学校からガリ勉の集まりって馬鹿にされてるそうなんすよ。だからそれに対して革命を起こそうと生徒会とその一部が……」

「くだらねえ、俺帰るわ。生徒会にもやらないって言っとけ」

俺は修平に背を向けて歩き始めた。

「勿論タダじゃないっすよ？」

その言葉に歩んでいた足がピタリと止まる。
我ながら現金な性格だ。

「森ノ宮高校のイメージアップと、不審者の取り締まりでそれなりに報酬を出すそうです。酒井先生はやるらしいっすよ。俺も金欲しいし」

「ふーん」

「せっかくだから参加しません？」

答えずに俺は再び歩き始めた。
そのとき、ふっと沙織の顔が浮かぶ。

「さっきアイツ……俺のこと何て呼んだ？」

自問自答のように呟き、全国一位の脳味噌をフル活用する。

“戻ってください……葵先輩”

「うわ……」

やばい、今更嬉しくなるなんて有り得ねえ。

「葵先輩？」

「今こっち見たら殴るぞ修平」

顔にどんどん熱が集まって、俺は右手で必死にそれを隠した。

29

「ちょっと沙織ー、いつから名前で呼ぶ仲になったのよー」
「さっきが初めてだよ……」

普通にしてた、羽山せ……もとい葵先輩。
私の中じゃ物凄い勇気出したんだけどな。

「顔が真っ赤なのは熱のせいですかー？」
「うるさい」

照れて隠しに枕へ顔を埋める。
それを見た佳苗さんは小さく笑って。

「まあ良かったじゃん、一步前進」
「……伯母さんと約束したから。先輩を名前で呼ぶって」

あの日、別れ際に伯母さんが私に耳打ちした内容がこれ。
驚いてあのと怒鳴ったけど、正直気付かれたことが意外だった。

「伯母さんにバレたんだね、先輩が好きなの」
「うん、……やっぱ母親代わりだからかな」

熱のせいで弱々しく微笑むしか出来ない私。

「頑張ったね」

「……ありがとう」

私はまた笑みを溢した。

「38度か……何で寝てて上がるんだ和泉」

「や、えっと……あの」

保健室に先生が戻ってきて、私はすぐに体温を計った。
体温の上昇に私を睨む先生はなかなか恐い。

「羽山に何かされたか？」

「ち、違いますから！」

「お前……ホントわかりやすいよな。うん」
「？」

ぽんぽんと頭を撫でられて、私は強制的に早退させられた。

「森ノ宮革命祭？」

「うん、夏祭りのなのやるらしいよー」

「へえ……」

結局私は部屋までお見舞いに来た佳苗さんに夏祭りの話を聞いた。
た。

「土日やるらしいからうちらも遊べるよ！ 浴衣着ようね」

「え……」

浴衣なんてもう何年も着てない。
歩きにくいし着付けが出来ないから浴衣は苦手だ。

「羽山先輩もいるってさ。良いのー？　せっかくのイベントに普通の私服で」

「うっ……」

それはまあ……困る、かも。

「着方がわからないならあたしがやってあげるし」

「……佳苗さん出来るの？」

はつきり言って物凄く意外なんですけど。

「だってうち茶道一家だもん」

「は？」

「言ってなかったっけ？　結構昔から先祖代々続いてるそれなりに由緒正しい家なんだー」

佳苗はへらっと笑みを見せる。

「……まったく聞いてないんだけど」

「あー、ごめんごめん。とにかく、浴衣もあたしが用意するから、大舟に乗ったつもりでいなさい！」

そう言って佳苗は元気よく沙織の家を出ていった。

「……ま、いっか」

熱のせいかな、問題に慣れたのか何事にもあきらめの態度をとるようになっていた。

「ねえねえ、修平君と葵君がナンパ男追い出したんだって！」

「マジで？ 流石御三家！」

「私も守られたいー！」

「今どこにいんの？」

「あっちあっち！」

まあ大人気な葵先輩。予想は一応してたけどね？

「……はっ」

「さ、沙織、鼻で笑わなくても……」

私と佳苗さんは中庭のベンチでかき氷を頬張っていた。

いつもの静かな校内とは180度違う。淡いオレンジの灯や並ぶ屋台。森ノ宮高校はホントに祭りムード一色になっていた。

「相変わらずモテますこと」

「それは修平先輩も同じだから」

「はあ……」

私達の重いため息に対して、周りの人間は楽しそうにしていた。

「あ、沙織。あれ」

「え？」

佳苗さんの指差す方には見知った長身が二人。

「イッテ……！ 何すんだよ、今良いところ」

「ああ？ 仕事に決まってるだろうが。こっちは報酬がかかってんだ」

凄い睨みをきかせる葵先輩と。

「この先輩、怒ると半殺しにしますよ？ 行きすぎたナンパはやめた方が良くっすよ？」

優しく注意する宮原先輩。

アメとムチってこういうことか、と悟る。

男達は二人を恐れたのか奇声を上げて逃げ出した。

「修平、俺悪役？」

「……少し笑顔を中心掛けたらどうかと」

葵先輩は紺色、修平は渋い緑の浴衣をそれぞれ着ている。

「先輩浴衣似合いますね」

「お前は変だな」

ぱっさりきっぱり言い放つ葵先輩に離れて見ても笑ってしまった。

「酷っ。俺も黒髪だったら……」

「色戻せばいいだろ」

「やー、抜いたから黒にならないんすよ」

「方法は二つあるぜ？」

「？」

「スキンヘッドにヅラか白髪染め」

「すいませんお断りします」

この台詞には佳苗さんがツボにハマったらしく、お腹を抱えて笑っていた。

確かに想像したら面白い気がするけど。

「あっそ。俺休憩するわ」

「わかりました」

葵先輩は一人でどこかへ。

「修平先輩！」

笑い終えた佳苗さんが真っ先に宮原先輩に近寄った。私もそれを追う。

「佳苗さんと沙織。お前らも来てたんだ」

「あたし祭り好きですからー。それより、浴衣似合ってます？」

くると一回転する佳苗さんは赤い浴衣を着ている。白い蝶が舞っていて凄く可愛い。

それに対して私は青色。白い朝顔が浴衣に咲いていて、自分でも悪くないと思った。

「んー、沙織は似合ってるよ」

「沙織はって！ あたしが聞いたのにー！」

私邪魔してるかなあ。

ふとどこかへ行った葵先輩を思い出す。

「あの、葵先輩は？」

「あー、向こうの美術室が俺らの休憩室だからそこで寝るって」

「そうなんですか……」

「行ってきたよ沙織」

宮原先輩が言う。そういえば、告白されてちゃんと会話するの久しぶりな気がする。

「でも関係者以外立ち入り禁止とかじゃ……」

「関係者じゃん。元パシリさん？」

佳苗さんはニツと私に笑いかけてくれた。

「……行ってくる」

二人に頭を下げて私は慣れない下駄で走り出した。

「失礼します……」

そろそろと私は葵先輩がいるはずの美術室に入る。
葵先輩は美術室にあるソファにぐったりと眠っていた。

「ホントに寝てた……」

起こさないようにゆっくりとソファへ近付く。
まつげ長いなあ……肌無茶苦茶きれいだし。

「羨ましい」

じつと葵の寝顔を見つめて呟く。見とれるっていった方が正しいかもしれないけど。
私無意識に先輩の頬にそっと手を伸ばしていた。

「んー……」

葵先輩が寝返りを打ったのに驚いて私は慌てて手を引く。

「びっくりした……っ」

というか、私今何したの？
自分の行動に恥ずかしくなって、頬を染める。

「沙、織……？」

少しぼーっとしていた私はいつの間にか起きていた葵先輩を前に慌てふためく。
寝起きの先輩は怠そうでまたかっこよく見えて、頭がグチャグチャ

になったから。

「し、失礼しました！」

「は？」

私は逃げることにした。

「あー……意味わかんねえけど待てコラ！」

一瞬の間を置いて、葵先輩は私を追ってきた。

よくわかんないけどホントすいません！ だから追わないでください……。

「わ……っ！」

ドンッと思いきり前を歩いていた人にぶつかった。

「す、すいませ……！」

思いつきり背中に頭突きしちゃったよ。

「あ……葵の元パシリさん」

勢いよく頭を下げた私の上からどこかで聞いたことのある声がする。
顔を上げると穏やかな表情の男子生徒の姿。

「え、っと……」

誰だっけ？ 先輩なのは見た目でわかるんだけど……。

「覚えてない？　夜の体育館で遊んだ仲なのに」

先輩は私の耳元で囁いた。

「……っ」

背筋がぞわっとする。言い様のない寒気。

彼の言葉で体育館で捕まった出来事を思い出した。

私は先輩……染谷先輩から離れる。

「思い出した？」

そんな沙織の行動でも彼の表情は崩れない。

「そ……染谷先輩」

「当たり前。で、君何してるの？　ここ関係者以外立ち入り禁止だけど」

「あ、その……先輩は良いんですか？」

葵先輩に会いに来たとは言いづらいんで、話を少しすりかえる。

「だって俺生徒会の手伝いだし」

「へえー」

あんまりやらなそうなのに。

損得で動くと思ってた染谷先輩の行動に私は意外としか思えず。

「こういう行事の役員は進学のとくに点数が高いからね。」

……成程。一瞬見直して損した。

「ちょっと迷っちゃったんです、失礼します」

無表情を装い、私は来た道に戻ろうとしかけた。

「ちょっと待って」

「……？」

そこで染谷に止められる。

「もう誰のパシリもやらないの？」

「……は？」

秀才の考えることはわかんないよ、まったく……。

「どういう意味ですか？」

「まあただの興味本意、かな？」

「……やりませんよ。」

「ふーん、どうして？」

不意に染谷先輩の手が伸びてきた。

突然で逃げることもままならない私は目を瞑る。

「触んな」

私は自分の体が後ろに動くのを感じた。
目の前には見知った広い背中が見える。

「ナイトの登場、ってところか？ 葵」

不敵に笑う染谷先輩に対し、葵先輩は鋭い目付きで睨んでいる。

どうすることも出来ない私はただじっとするしかなくて。

「盗み聞きは感心できないな」

「知っててやってたわけか、趣味悪いな」

でも葵先輩につかまれたままの手首が熱を帯びてる。それが私にはなんだか恥ずかしかった。

「先輩、何で……」

「お前が逃げたから追ってきた。」

「べ、別に逃げたわけじゃ……!」

「勝手に話進めないでほしいんだけどなあ。」

苦笑いして染谷先輩が言う。

私と葵先輩の視線が染谷先輩へ注がれ、再び彼が口を開く。

「残念だけどこれから花火大会の準備なんだ。悪いけどまた。あ……それと葵」

一度歩き出した染谷先輩だけど、急に振り返った。

「あ？」

「今日の報酬は屋上貸し切りだから。ちなみに使用期限は今夜まで」
「……は？」

目を真ん丸にする葵先輩。

「金じゃねえの？」

「私立とはいえ、これだけ大規模な祭り開いたんだ。そんな余裕あるわけないだろ」

「マジかよ……」

葵先輩がとうなだれる。

「今から三時間後、お前らのために貸しきったんだ。有効に使いなよ」

葵先輩を指差し、きつく言い放って去っていった。

「あー騙された」

「何がですか？ さっきから意味わかんないんですけど」

二人でわかってて何かずるい。

「……こっちの話。お前ヒマ？」

「まあ」

「じゃあちよっと付き合え」

「？」

30

「はぁ……これで何もなかったら羽山先輩の性別疑いますよ?」

カラコ音をたてて走るのは大切な親友。

佳苗はポツリと呟くと横を見た。

「……今から言うのは俺の推測だけどさ」

ふと真剣な表情になる修平。

「?」

「葵先輩、自分から人を好きになったのって菜々先生が最初だと思うんだ」

「えー……だって今までいっぱい女の人と付き合ってきたじゃないですか」

「うん。全部相手から告白されたんだよね」

「あの人どんだけモテてんだろう……」

佳苗には驚きより呆れの方が勝っていた。

「だから、たぶん両想いなのって初めて、かも」

「……両想い?」

「たぶん、ね」

「マジですか」

それはまるで自分の恋が叶ったような喜び。
きゅっと顔をほころばせて佳苗は笑う。

「……それより」

ポンと佳苗の頭に修平の手のひらが乗る。

「？」

「浴衣、まあまあ似合ってるよ」

「……まあまあってのは余計です」

修平の手を退かした。

「でも、ありがとうございます」

満面の笑みを見せる佳苗に修平も頷いた。

「あ、これからあたしUFO研究同好会の発表見に行くんですけど一緒にいきますか？」

「……そんな同好会あったんだ」

呆れながらも佳苗についていこうとする修平の前に現われた一人の女性。

「あれ……副会長？」

「あ、こんばんはー！ 副会長も浴衣似合いますねっ」

眼鏡をかけた副会長は淡い水色の浴衣姿で。
可愛らしさに佳苗の目が輝く。

「宮原君に一言伝えたくて」
「何すか？」

修平の問いに副会長は綺麗に笑った。

「今日の報酬は屋上貸し切りだから。ちなみに使用期限は今夜まで」
「……え？」
「それじゃ、頑張ってね」

沙織と同じようにカラコロと音を奏でて副会長は去っていった。

「報酬って、今日のお祭のですか？」

佳苗が修平を見上げると、カタカタ震える姿が目に入る。

「修平先輩……？」
「やばい」
「？」
「葵先輩に殺される……！」

「はい、そこまで」
「酒井先生……！」
「うちの生徒に、たからないでもらえますか？」

いつも通り笑顔で酒井は微笑んでいる。

言われた相手の不良は怒りからか拳をわなわなと震わせ、助けられた男子生徒は嬉し泣きで涙目だ。

「ヘラヘラしてんじゃねえよ……このクソ教師！」

殴りかかる不良をさらりとかわし、その腕をつかんだ。

「うっ、わ……！」

どすん、と大きな音が鳴る。

見事な一本背負いに涙目の生徒も啞然としていて。

「君にクソ教師呼ばわりされることはありません」

笑顔のまま酒井がそう言えば、不良は人混みに消えていった。たかれた生徒に安否を確認した後、酒井は見回りに戻った。

「ふう……」

「友喜さんお疲れ様」

「菜々」

自分の想い人が現れ、すぐに顔を綻ばせる酒井。

「相変わらず見事な一本背負いね」

「見てたんですか」

苦笑をもらす酒井に菜々は腕をからめた。

「怪我しない程度にしてね？」

「勿論。もうすぐ君のご両親に会うんですから」

幸せそうに二人は微笑んでいた。

***30* (後書き)**

読んでくださりありがとうございました。

今日はバレンタインですね。私はチョコと触れ合わずに終わろう
とします (笑)

先を書くのに必死で、誤字があるかもしれません。その点では深く反省しますのでお許しください。

31

「……金魚、ほしかったんですか」

「今集中してんだから邪魔すんな」

いやいや、そっちが付き合えって言ったんじゃないですか。

葵先輩は真剣な面持ちで青いプラスチックの水槽を見つめる。

そこには赤や黒の小さな金魚達が尾ひれを揺らせて泳いでいて。

「兄ちゃん頑張りな」

「おーよ」

いつの間にか屋台のおじちゃんとも仲良くなってるし……。

私はただ葵先輩の後ろ姿をぼんやり眺めるだけ。明らかに浮いてるのは勿論わかってる。

それは周りの人間からの視線も充分刺さってる。

「葵君が金魚すくい……」

「ギャップあるわね」

珍しそうに見守る人や、ギャップの可愛さに騒ぐ人もちらほら。

「はぁ……」

確かに変だけど、たまにはこんな先輩も良いかもしれない。

微かに頬を色付けて私は思った。

「惚れた弱味って怖い」

「だあつ、逃げられた！」

私の呟きは葵先輩の叫びに思いっきりかき消された。

その後、空を見上げて大きく深いため息をついたのはいうまでもない。

「暗いですね……」

「もう七時だからな」

私と先輩は屋上にいた。一応貸し切りの報酬を使ってるわけで。

「良かったんですか？ 貸し切りなのに私がいて……」

「一人で花火見る趣味はねえよ」

「なるほど」

「おら、もうすぐ始ま」

先輩がそう言いかけた瞬間、空が七色に輝いた。

「すごい……」

中庭やグラウンドより、屋上の方が花火を見る絶景ポイントで。

私はまばたきを、葵先輩は火のついた煙草を口に運ぶことを忘れて見入っていた。

「……沙織」

「はい？」

おもむろに葵先輩が私を呼んだから横を見上げようとしたとき、唇に暖かいものが触れる。

「あ、……ごめん」

顔をほのかに赤くして葵先輩はその場を走り去った。

「今のって……」

キス、された？

私はその場に崩れ落ちた。今までで一番の赤ら顔で。

「あれ……沙織？」

「か、佳苗さん？」

そこにはたこ焼きを片手に持つ修平と、屋台でよく売っているお面とをつけた佳苗さんがいた。

「何で座り込んでんのー？ 何かあった？」

「あ、えーっと……」

先輩からのキスに驚いて腰を抜かした、とは言いたくない。必死に言葉を探すものの、出てくるのは汗だけだった。

「葵先輩関係？」

「み、宮原先輩まで……」

私は浴衣を握り締めて佳苗さんと宮原先輩を見つめる。

「キスしてきて謝るってどういうことですか？」

「……は？」

それから数日後。

「あれ？」

「どうかしたー？」

「……上靴が無い」

「え」

「家に持って帰ってないよねえ？」

「うん」

ペタペタと廊下からスリッパの音が鳴る。

結局私の上靴は何処にも無くて、学校のスリッパを借りることになった。

「まあ、いじめってどこかな」

「いじめ？ そんなわけないよー！」

「はい」

「何さ、これ」

佳苗さんに手紙を渡す。不思議そうな顔をしつつ封筒から取り出して中身を読んだ。

「……思いつきし脅迫状じゃん！」

「私から見たら不幸の手紙に思うんだけど」

“羽山葵に近付くな。これに従わないと不幸になる。”
そんな内容の手紙だった。

「明らかに葵先輩のファンだし。気になるのは今までなかったのに急にこんなことになってることなんだよね」

いたって私は冷静だ。だっていずれこうなる気がしてたから。

「それはやっぱりアレじゃない？」

「……アレって？」

「夏祭りの日だよー。一緒に遊んだんでしょ？」

佳苗さんはキスの話はもうしてるから遊んだこともわかってるみたいで。

「遊んだっていうか……先輩が金魚すくいに夢中だったから構ってもらってない」

結局金魚とれなくておじちゃんに一匹もらってたし。
その光景はちょっと面白かった。

「でもパシリじゃないのに遊んだっていうのはファンには恨まれるんじゃないかなあ？」

なるほど、と納得する。

「……近付くな、か」

「とりあえず、あんまり相手を怒らせない方が良いでしょう？」

「……わかった」

「とは言ったものの」

その夜。自室にいる私の前には学校の机に入っていた新たな封筒。勿論名前なんかない。

「これじゃノイローゼになりそう」

ため息を吐きつつ封筒の中身を読む。

「同じ内容だし……」

私はベッドに倒れ込んだ。スプリングがきしんだ。

「葵先輩何してるかなあ……」

未だ届かない想いは募るばかり。

32

暗いところで見た沙織はいつもと違った。浴衣も着てたし。祭で最初に会ったときから、俺はおかしかったかもしれない。

「はぁ……」

校門の辺りは人通りが少ない。

頭をガシガシかきながら学校を出ようとする。

「葵君」

「……何だよ酒井」

「そう不快な顔をしないでくれませんか？」

満面の笑みを見せる酒井に呼び止められた。俺の気分は急降下していく。

「俺さぁ、今最悪に気分悪い。だから早く帰りたいんだけど」

「おや、戦いに負けて帰るみたいですね」

「あ？」

「沙織さんと、一緒だったんじゃないんですか？」

沙織の名前を聞いた瞬間、頬に熱が集まる。

「いつからそんなわかりやすくなったんでしょね」

クスクスと酒井から笑いが溢れる。

「うっせえ」

顔を合わせるのも嫌になって酒井から目をそらした。

「良いんですか？ 沙織さんを一人にできて。せっかくのお祭りなの」

「お前、人が傷付いてんのに軽くそんな台詞吐くのな」

「おや、葵君傷付いてるんですか？」

意外そうな顔で酒井は人を見る。

「相談ならいくらでも受けますよ」

「帰る」

酒井に相談なんかしたら笑われるのが落ちだ。

「傷付いてるのは、置き去りにされた方だと思いますよ？」

屋上での出来事を見てたような言葉に立ち止まりぐっと思を飲む。

「さて、僕はそろそろ持ち場に帰ります」

「……酒井！」

眉間に深いシワを寄せて、酒井を見ずに呼び止めた。

「はい？」

酒井の振り返る音がしたが俺が振り返ることはしない。

「体が感情より先に動くこと、あるか？」

「……それは貴方がよくわかってるんじゃないですか？」

まだ花火が上がっていた。所々で人々の楽しそうな声が遠くで聞こえる。

俺と酒井の間は静まり返っていて。

「菜々のために僕を殴ったのは、体が勝手に動いたんでしょう？」

俺は黙り込む。

「否定しないのは肯定ととります。それほど彼女を真剣に愛してくださったのでは？」

そうかもしれない。

あの頃はただ一直線に想えてた。ただ一人の女を。

「生意気なこと言ってすみませんでした。でも、たまには教師らしくしたかったですよ……失礼します」

背を向けていたから、酒井が去っていくのが音だけでわかった。

「真剣に愛してた……か」

自分らしくもない。

ぼんやりとそう思いながらも俺は煙草に火をつけた。

「ただのパシリだったのにな……」

沙織はいつの間にか誰にもとられたくない存在になった。

肺に入った煙を吐き出しつつも自嘲気味に笑い、俺は学校を離れた。

それから数日後。

俺の生活で問題は常に起こるものらしい。

「……俺が何したってわけ？」

「葵先輩！ この前の夏祭りで沙織に……って何ですかそれ」

「……愛がこもりすぎた手紙」

大きな問題が起こっていた。

「男のストーカーならやっぱり女でしょう」

「……字は脅迫状みたいだけどな」

俺と修平は相変わらず屋上に入り浸る毎日。

地面には新聞紙や雑誌の切り抜き文字で作られたであろう手紙があった。

“いつもアナタを見てます。”

「……面倒くせえ」

手紙をグシャグシャに丸めて心底深いため息を吐き出した。

「はぁ……」

俺は自室のベッドに座っていた。

少し離れた先にあるテーブルの上には数枚の写真が広げられている。

「留守電聞いたんですけどストーカーからまた手紙来たんですけど？」

「修平、勝手に上がり込むなよ」

「それ言うなら自分ん家のドアの鍵くらい閉めてくださいよ」

「……開いてた？」

「バッチリ」

殴りたくなるよな、その満面の笑み。

「あ、これ差し入れです」

コンビニ袋から出たのはスナック菓子や酒のツマミ。

「もう少しバランス考えて買えよ」

「あれ、食べないんすか？」

「食う」

修平に苦笑いされたのにむかついたから、軽く殴っておいた。

「先輩のストーカー凄いつすね」

「は？」

コンビニで買ったさきいかをくわえたまま聞き返す。

「だってこれ寮に入るときの写真つすよ。先輩の帰り待ってたんですかね」

三十枚近くある写真の山をかき分けて、修平は言う。

「さーな」

「あ、これ夏祭りのときつすよ」

夏祭り？

「そんなのあったか？」

身を乗り出して修平から写真を取り上げる。

「ほらこれ。下の方にあったから気付かなかったんじゃないっすか？」

修平から渡された写真には沙織と並んで歩く自分の姿があった。

つい写真の中の沙織を見てしまう。

「先輩？」

「あ？」

「写真、見すぎですよ」

修平は少し楽しそうだ。俺は視線を反らす。

「そんな好きなら告白すればどうですか？」

出来るならしてるっての。

自分から告白したことのない俺は、いまいちどうすればいいかわからずにいた。

「でもまあ、しばらくは会わない方が良いと思いますけど」
「？」

「だってストーカーに沙織が怨まれちゃいますもん」

「そうだな……」

会えないことを自覚すると、無性に沙織に会いたくなった。

33

「あたしいっぱい手紙送ったじゃない。読んだでしょ？」

その日、私は体育館裏にいた。

「読みました」

拳を作る手からは汗がしっとり現れる。

夏の暑さからか、それとも目の前でカッターを近付けてくる人に対しての恐怖からか。

「じゃあ何で葵君と一緒にいたの？」

質問をどんどんぶつけてくる女の方は、結構可愛らしい先輩で。

「私、パシリ辞めたから最近先輩と一緒にいませんよ」

「嘘言わないで。昨日保健室にいたでしょ」

先輩は目を光らせて私を睨んだ。

「あれは具合が悪くて……！」

「二人で連絡取り合って会う約束したんでしょ？ 元パシリだもんね」

「違いますってば……」

自分の言葉は何も信じてもらえない。
それほど彼女は怒ってるんだ。

「よく寝てたねー」

「……佳苗さん、ノート見せてください」

睡魔に勝てずに、授業中に眠ってしまったのは昨日のこと。

「珍しいよねー、沙織が授業中寝るなんて。寝不足？」

「うんまあ……」

謎の脅迫状から一週間が経過しているにも関わらず、手紙はいつも机や下駄箱に入れられている。しかも内容は同じ。
それが私を徹夜で悩ます原因だった。

「恋煩いってヤツー？」

「何言ってるの」

佳苗さんには脅迫状の継続を教えていない。これ以上心配かけたくないから。

「はあ……」

頭がボーッとする。

自分の体が不調を訴えているのを感じた。

「保健室で寝てきなよ」

「え？」

「顔色悪いよ？」

心配そうに沙織を見つめる佳苗さん。

眉を八の字にしてややきつそうなつり目はいつも与えられる印象が強い。

「大丈夫だよ」

「それでこの前は熱があったよね」

「えーと……」

「はい、行きましょー」

私は半ば強制的に保健室に向かった。

「失礼しまーす……あ」

「あ」

先頭で歩いていた佳苗さんは保健室にいた先客に目を丸くした。

「？」

私には背中しか見えない。

「羽山先輩、こんにちはー」

「……おう」

佳苗さんからの挨拶をぶっきらぼうに返すその声は私にとって一番嬉しい人のものだった。

「あ、ほら沙織早く寝たら？」

「う、うん……」

保健室に入ると一気に葵先輩の香りが体を包んだ。一週間会わなかっただけなのに、私には泣きたくなるほど鮮明に。

「じゃあ後で迎えにくるからー」

「あ、うん……」

痛々しいくらいの沈黙が流れる。

夏祭りのキス以来、私達は会話は勿論会うこともなかった。

タイミングの悪いことに、保健室の先生も席を外している。私はベツドに潜り込んで体を丸めた。

「……沙織」

葵先輩は沈黙に耐えかねたのか私の名前を呼んだ。

「……はい」

背を向けたまま、私は答える。

「夏祭りのときは、その……」

「謝る意味がわかりませんが」

「……まだ何も言ってねえ」

不機嫌そうな声が聞こえた。

「わかりますよ。いいじゃないですか、もう過去のことです」

本当はどうでもよくないけど、先輩から謝罪をされなくなかった。

「……わかった」

それから私達が会話を交わすことはなく、まだ授業が終わっていないのに葵先輩は保健室を出て行った。

その後、教室に戻った私の机には手紙が入っていた。

「あたし聞いてたんだから。保健室の前で」

ここで現在に至るわけで。

「喧嘩してたんですよ？」

「貴方にとっては喧嘩しただけでも、あたしには大事件なの」

ジリジリと女の先輩は私との距離を縮める。

「あたしは、本当に好きなの。葵君のことが」

先輩はカッターを持ったまま、真剣そのもので。

気持ちに嘘がないのがわかった。

「入学したときから憧れてて、三年でやっとクラスメイトになった。クラスで見てるだけでも幸せだったけど、欲が出てきた。パシリになればもつと葵君に近付ける」

葵先輩のクラスメイトだったことを今更ながら知った。

「パシリが変わる度に、あたし緊張した。もし自分がなったら絶対葵君のために命賭けるって。だから、消えて？」

私の視界に先輩の完璧すぎる笑みが映った。

「はっ、はあっ……」

私と先輩の荒い息遣いだけが空間を作ってるみたいだった。

彼女が持っていたカッターには何も付着していない。間一髪で私が避けたから。

「……何で避けたの？」

「つい反射で」

そんなことしか私には言えなかった。ほとんど無意識だったんだ。

「じゃあ避けないで？」

消えそうな笑みでそう言われた。

「無理です」

「……え？」

「私、まだ先輩にちゃんと気持ち伝えてないんです」

真っ直ぐ先輩を見つめる。でも自分の足は微かに震えた。だって恐い。怪我するかもしれないから。

「私も葵先輩が好きです」

ちゃんと声に出したのは、久し振りだと思った。

「だから先輩の前から消えたくないし、貴方の気持ちもわかります」

「あたしの気持ち……貴方にわかるって？」

私は強く頷いた。

「誰にも話しかけて欲しくない。私だけ……私だけ特別にして欲しい。そう思ってるんじゃないんですか」

黙り込む様子は肯定ととれた。先輩が持ってたカッターが地面に向いた。

「少なくとも私はそう思ってます」

「貴方……葵君の何なわけ？」

「元パシリですね」

今のところはですが。

私は困ったように微笑む。

「葵君のストーカーにはつきり自分の気持ち言うなんて……馬鹿でしょ」

「はい、馬鹿で……ストーカー？」

ストーカーってあれ？ あのストーカー？

「あ、知らなかったの？」

「何……どうなってるんですか？」

「……アホらし。帰るわ」

一人さっさと歩き出してしまふ先輩。

「え、ちょっと……」

話に全くついていけない私は戸惑うばかり。
先輩は足を止めて振り返った。

「貴方を傷つけてまで葵君を手に入れるべきじゃない。っていうか貴方みたいな人の方があの天才には釣り合ってるのかもね」

「……はい？」

「じゃあね」

それだけ言って女は去っていった。

「……褒められたのだろうか」

謎は深まる一方だ。

でもとりあえず生きてて良かった、私。

「ちょっとアンタ」

「？」

ほっとしたのも束の間に、私は誰かに呼ばれて振り返った。

***33* (後書き)**

いつもこんな駄目な小説を読んでくださり、ありがとうございます。
す。

長かったですが、ようやく最終話まで話を書き上げました。
もうすぐこの話も終わりです。最後まで楽しんでください。

34

「悪い、修平待たせた……」

「や、全然大丈夫っすよ」

帰りに買い物行きたいって言ったら良い店があるという修平の言葉で教えてもらうことにした。

「修平先輩、羽山先輩！」

「佳苗さん？ 何慌てて……」

上原への酔っ払いイメージはなくならない。
俺はどこことなく距離を開けた。

「沙織がどこにいるか知りません？」

上原は泣きそうな声で尋ねた。

「知るか」

それを冷たくあしらって帰ろうとする。

「どうしよ……脅迫状の人に何かされてたら……」
「脅迫状？」

「何の話だよ」

沙織のことで進みかけた足は止まった。

「羽山葵に近付くなって手紙がこの前来たんです……」

「おい、それいつだ？」

上原の肩に手を乗せて聞く。

「一週間くらい前に」

「葵先輩がストーカーから手紙もらいはじめた頃だ」

「修平、やっぱ買い物無し。それとどっか置いとけ」

修平にカバンを投げる。

「あ……はい！」

人の集まらない場所のリストを頭に浮かべ、俺は走り出した。

「さて、帰りましょうか先輩」

「え？ 沙織探さないの？」

目を丸くして修平は言った。

「二人にさせてあげましょうよ。暇ならあたしのお買い物付き合ってください」

腕をまわして佳苗は笑った。

ふう、とため息を吐き出し修平が一言。

「……しょうがない、付き合いましょ」

「まあ、出来れば恋愛の方でも付き合ってもらいたいですけどね」
周りにはまだ帰宅しようとする生徒がいるのに、さりげなく告白している佳苗。

「それについては今日のデートで決めようか」

そして修平はさらりとそれを受け入れる。

「……帰りが楽しみです」

「そう？」

「修平先輩、その余裕無くしてみせますから」

「ま、期待しとくよ」

この二人が付き合う日はもうすぐ……かも。

「須賀？」

「……あ」

体育館裏へ向かう途中、俺はクラスメイトの須賀実加スガミカに会った。

「珍しいな。須賀って確か帰宅部だろ？ 体育館に用事あったのか？」

「あー……葵君」

複雑そうに須賀が口を開いた。

「？」

「ごめん」

「……何が」

「葵君に手紙送ってたのあたしなんだよね。ほら、写真とかも」
「は？」

開いた口が塞がらない、まさにそんな気分だった。

「……あたし、葵君が好き」

そう言った彼女の顔はどこかすっきりしていた。

「須賀の気持ちは嬉しいけど」

「わかってる。葵君のことずっと見てきたから。だから……」

謝らないで欲しい、須賀はそう言った。

「……ありがとう」

「え……？」

「謝るなって言われたんだから礼くらい言ってたって良いだろ」

意外そうな顔でまばたきする須賀。

俺が礼言うのがそんなにかしいのかよ。

「変わったね。うん、凄い変わった」

「はぁ？」

何が変わったってんだ？

「だって女の子に告白されてお礼言う葵君なんて見たことなかったもん。あの子のお陰かな」

俺はなんとなく頭をかいた。

クスリと須賀がそれを笑い、優しい瞳に俺を映す。

「今和泉さんに会ってきたの。聞いてた話と全然違う子で安心しちゃった」

「話？」

眉をひそめて須賀に聞き返す。

「うん。葵君のファンの子達があたしに相談してきたの。和泉さんの事で」

その瞬間、頭に一本の線が繋がった気がした。

「それどんな話？」

「え……葵君と宮原君に二股して付き合ってるとか、実際は媚売ってパシリになった、とか」

全部嘘じゃねえか。

「アイツ今どこ？」

「まだ裏にいると思うけど……」

「サンキュ」

手間のかかるヤツ。

俺は再び走り出した。

「ぞっこんなのは…葵君もなのかも」

それを見つめる表情は晴々としていた。

35

あー……痛いなあ。

壁に思いきり押され、頭がズキズキと痛み出す。

「実加も使えないわね、さっさと怪我させれば良いのに」

この声には聞き覚えがあった。

葵先輩のファン、それが頭を占める。

「和泉さん、あたし言ったわよね？ アンタみたいな凡人が近付くな
って」

絶対的な笑顔で近寄ってくる。

「言っていました」

「じゃあ何で葵君が好きとか言ってるの？」

「釣り合うわけないじゃん！」

そう笑われた瞬間、私の中で何かが弾けた気がした。

「……さい」

「は？」

「うるっさい！ アンタらだって凡人でしょうが！」

先輩相手に、思いっきりキレてた。

「な……っ！」

言われた先輩達は顔を真っ赤にしてる。

あー、私こうなったらもう止まらないよ？

「っっていうか化粧濃いよ！ 香水臭いし！ 葵先輩はそういう人嫌いだって言ってた」

物凄い形相で睨まれてるけど、もうなんかどうでもいいや。

「それに、先輩普段恐いし、購買のパン好きだし、照れ屋だし……人よりちょっと頭が良いだけで天才なんかじゃない」

何を言ってるのかわからなくなってきた。
それでも。

「人を好きになるのに、釣り合うとか釣り合わないとか、必要なんですか」

悔しそうに視線を泳がせる先輩と大声のせいで息を切らす私に流れる沈黙。

「必要ねえんじゃない？」

それを破ったのは私でも先輩のファンでもなく。

「葵先輩……」

「お前、先輩相手にキレてどうすんだよ」

葵先輩だった。

なんだよー、困ってるときにばっか来てきれるなんて。

「い、良いじゃないですか別に！」

今になって怒鳴ったのが恥ずかしくなって私は耳まで赤くしていた。

「あ、あの……葵君？」

ファンはおずおずと葵先輩に寄った。

「……悪いけど、もうコイツに手出ししないでもらえる？」

「っ、ごめんなさい」

葵先輩の威嚇に近い微笑みで怯んだ先輩達は逃げるようにその場を去った。

呆然とその女達の後ろ姿を見る私。

「あーあ、酷えことすんなアイツら」

葵先輩の呆れたような声が私の耳に入る。

「うわ……頭腫れてんじゃん」

大きな葵先輩の手が私の後頭部に触れた。

「……っ」

私は顔を赤くした。

「怖かった？」

「べ、別にっ」

触れられた頭がどんどん熱くなっていく。

「もう少し早く来てたらこんな風にならなかったかもな」

「これは私の勲章ですよ」

「……何言ってるんのお前」

「馬鹿にしたような目でこっち見ないでください」

悲しくなってしまうから。

「好きな人を否定されて怒ったんですもん。私はこの痛みがある限りその気持ち忘れないでいられるし」

「好きな人……」

「本人は気付いてないんでしょうけどね」

自嘲気味に私は笑った。

「ワガママなところあるし、暴力的だし…何でこんな人を好きになっただかわかんないんですよ、未だに」

葵先輩に会って三ヶ月経っていた。

今思い返せば、短い期間に色々ありすぎて。

「好きになっちゃったんです。葵先輩が」

真っ直ぐ葵先輩を見つめる。
やっと言えた。

「お前……馬鹿」

「はっ？ 人が告白してるのに馬鹿って」

その続きを言うことが私は出来なかった。

葵先輩の顔が真っ赤すぎて驚いたから。

「俺から言いたかったのにお前先に言うし」

「……ホントですか」

「この状況で嘘言ってどうすんだよ」

体から溢れ出すこの喜びを、私は上手く表現出来なかった。

「じゃあちゃんと好きって言ってください」

「俺は……」

私はスカートの裾を握り締めた。

「俺はお前のこと」

「……っ」

生唾を飲み込む私。

「あー、駄目だ」

「は……？」

「お前が全国模試で一位とったら言う」

「……えええ」

何ですかその条件。

「それまではお預け」

……今日から猛勉強しなきゃ。

本気で頑張ろうとしている私とそれを見て笑っている葵先輩。

私の非日常的生活はまだまだ終わらない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2308b/>

凡人と天才？

2010年10月28日07時29分発行